
賞金剣維新譚

月織黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賞金剣維新譚

【Nコード】

N17120

【作者名】

月織黎

【あらすじ】

時代は『首』ではなく『剣』に賞金がかかった時代、『賞金剣維新』の只中だった。異端の銃使い、『代行篡奪者』レイリア・グロ―テックはある日、空から降ってきた『神剣返還神』を名乗る、漆黒の神剣・神喰を持つ純白の少女と運命的な邂逅を果たす……。天才主人公の挫折と復活を描いた、月織作品の中ではじめての『異世界ファンタジー』ものです。とくにご覧あれ！

第一部 賞金剣維新（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第一部 賞金剣維新

序章

*

空から美少女が降ってきた。

但し、大太刀の鋒を俺に向けて。

「　　っ！！？」

それは一瞬だった。辛うじて悲鳴を上げそうになるのを堪え、即座に上体を起こして横に飛ぶ。

青芝に寝転がって目を瞑り休憩をとっていたところで、不意に陽の光が射さなくなったと思って目を開ければ、そこにはそんな光景が広がっていたというわけだ。

次の瞬間。俺が寝転がっていた大地に深々と大太刀の刃が根元まで墓標のように突き刺さり、それを手にしていたところの少女はというと、物の見事に着地に失敗したらしく、派手に衣服を着崩れさせて後転するかのよう一回転して尻から叩き付けられていた。首から足首まで一反の布が切れ目なく全身を覆っている衣服。

……着物 東方の人間か？

着流した長着ながぎを腰骨の高さで帯を巻いて固定している。袖に大きな袂を蓄え、素材は絹だろうか 細かいことは門外漢である俺には分からない。ただなんとなく高潔感溢れる感じた 柄がらは、珍しいことに、わびもさびも一切ない完全たる無装飾。色は、一貫して純白。

ここから先は衣服ではなく女の容姿についての記述になるが見たところ年頃、十六、七の少女。無造作に垂らした髪量が恐ろしく長い……というか多い。今は尻もちをついているから分からないが おそらくは裾くらいまでであるだろう。色は、これまた一貫して純白。

眉は薄く鼻筋はくつきりとしており、唇は人工的に施したとみられる赤みを帯びている。肌の色が……これこれまたまた一貫して純白。よくできた陶磁人形のように儂くも美しい白い肌。生きて動いているのが奇跡のような、まさしく美少女と呼んで差し支えないだろう。

繰り返すが、色は、全身くまなく、一貫して純白。衣服との相乗効果も相俟って気高い白百合を連想させるその姿はまさしく、清廉純潔を絵に描いたかのよう。およそ人外の美しさを持つ少女だった。否。『陶磁人形のように儂く』は、次に開かれた、全身で唯一赤い唇によって否定される。

否々。『清廉純潔』は、次に開かれた、瑪瑙のような色を湛えた吊り目がちな両目によって否定される。

「いつ……たたあ……ってえ！ ちよつと！ なんて避けるのよっ！！」

「いきなり空から奇襲されて避けない阿呆が、このご時世どこにいるっ……！」

唇は、開かれた、というより、打ち開かれた。

両目は、開かれた、というより、見開かれた。

いきなりの不条理な怒鳴りつけには、俺もそれ相応の対応を以て返す。いやまあ、このご時世と言わずとも、いつの時代にもいないだろうが。

それでも、純白の乙女は尚も食い下がる。

「こんなに可愛い娘が空から降ってきたのよ！？ 受け止めるくらいが普通でしようがっ……！」

「そんな物騒な大太刀も一緒に降ってきたら、受け止める前に俺が死ぬわ……！」

理不尽甚だしい。少女はようやく尻をさすりつつ、よっこらせつと、少女らしからぬかけ声を発しつつ立ち上がって、着物についた汚れを軽くはたき、大太刀を地面から引き抜く。

そこで気付く。

「その太刀……長すぎやしないか？」

引き抜いた大太刀は……大は大でも大太刀過ぎた。全長は短く見繕っても、六尺半。明らかに少女の背丈よりも長い。そういえば、さっきの接地も《刀が先で少女が後だった》。少女が小柄で、身体を丸めたり足を曲げたりしていたというわけではなく、である。

拵えは、柄は柄頭から縁まで 頭金・目釘・目貫に至るまで

今度は、少女のそれとは一転して漆黒。なんとも変わったことに鏢がなく、ともすれば刃と縁との境界さえも曖昧だ。刃長だけでも五尺はある、彎と緩く反り、その幅は九分二厘というところか。刃長の割には短い反りである、いつそ直刀と言ってしまっても良いかもしれない。描く刃紋はほっそりとした直刃、銚子は返りのない焼詰型で、およそ装飾といったものが一切ない。だがここで敢えてその大太刀 否、もういつそ巨太刀とさえ言っても差し支えはないだろう。の特徴を挙げるとするならば、刃が《恐ろしく細い》、ということにあるだろう。鎗筋の部分でさえ一厘の薄さもなく、刀身を太陽にかざせばその向こう側さえ透けて見えてしまいそうなほどに薄い。剣戟を交わすまでもなく、一撃で呆気なくへし折れてしまふいそうな脆さをも感じさせる抜き身の刃。抜き身といえは、鞘が見当たらない。腰から提げてもしなければ、肩から背負ってもいけない。あの長さの刀身を納める鞘を隠すことなど、できないだろうに。

純白の少女に漆黒の刀。強き少女と弱き刀というマッチは、かえって絶妙とさえいえるだろう。

「……ねえ」

「……」

「ねえってば！」

「……ん？ ああ、なんだ？」

「なんだ、って……さっきからブツブツと煩いんだけど」

「……ああ」

思わず口を塞ぐ。つい俺の悪癖が出てしまっていたようだ。刀剣の類を見ると、思わずその形状や特徴を独り言として呟いてしまう

癖。……長らく剣を振るっていないが、その癖は未だに抜けないから困ったものだ。

まだ……未練があるのだろうか。

まあ。

未練があるから、俺は今でもこんな仕事をしているわけで。

「そんなに気になる？ この刀」

少女はそう言って、巨太刀を見せびらかすようにかざすと。

先程の接地に費やした時間が一瞬なれば、それは、まさに、刹那。

斬、と。《俺に向けて、少女が刀を袈裟掛けに一閃していた》。

「！？」

先程は辛うじて堪えた悲鳴をしかしながら、今度は上げる間もない。俺は瞬きすら尚長い一瞬の時間のうちに、《体内を刃が通過していったのを感じ取り》同時に訪れるはずの死を覚悟した。俺の右袈裟から左腰にかけて剣尖を振り抜いた少女は微塵も如才のない、一切の剣筋のぶれもない、流れるような所作で、とはいえ、停めるべきところではしっかり停めている。手許に巨太刀を戻した。俺はその姿が三途の川の道先案内人へと変わるまでの僅かな間、瞠目してただただ一部始終を目撃していた。冬に芽を凍らせる木の実のように伶俐な表情が。

「……なんて。びっくりした？」

唐突に。春になり蕾が開いた花のように、あどけない笑みへと変わる。

「ちゃんと見てよおにーさん。《身体、どこも斬れてなんかいないでしょ》？」

「え……。あ？」

自分の身体のことだというのに可笑しな話ではあるが……直に触って確かめる。

「『神劍』よ」

「なっ……!?!?」

俺は思わず絶句する。想像していた通りの答えであったのにも
かかわらず。今度こそ、声を上げるのを堪えることができずに、
みっともなく絶句した。

神劍 神造の剣だと!?

「信じられない? でも本当。これは神によって造り出された剣。
折れず砕けず曲がらず、そして物質を斬れず、故に決して刃毀れも
しない神劍。ただ一つ概念 《『神を殺す』という概念のみし
か両断できない剣よ》」

漆黒の太刀を携えた純白の少女は。

あくまでも不敵に。

どこまでも無敵に。

笑みをこぼして、放言する。

「真名を、『神喰』」

*

現在、世界中に『ギルド』と呼ばれる施設が、五万と言わず
十万と言わず、大小様々とにかく無数に存在する。主に情報を交換
するギルドでは、組合という名を冠するようになり、毎日毎夜年から年
中二十四時間間断なく、男女問わず年齢問わず、まさしく老若男女
の賞金稼ぎ達が富と名誉を求めて訪れては、最新の賞金がかかった
ものを狙って世に飛び出して行っている。

しかし今日、主に賞金がかかっているのは、?首?……ではない。
?剣?、である。

四十年前、この世に生ける伝説とも呼ばれた刀工がいた。名をキ

ネスシス・ロイヤルアート。彼は、魔術師の家系に産まれたわけでもなければ育ったわけでもなかったにもかかわらず、天才的な魔術の才に恵まれていた。剣を打つのが好きだったというキネスシス。一本一本に自らの魂を分け与えるかのように無数の刀剣を造っていた。故に彼がその魔術的な才を惜しまず打った刀剣の数々は悉く『魔剣』と賞され、精霊の加護を受けたその剣の中には『精剣』とまで呼ばれるに至ったものさえあった。その総数は数千本にも及び、特殊な能力を持ったそれらを世界中の剣豪が追い、求め、狙い、奪い、集め、欲し、果たし合う。そんな一大ブームが起こっていた。優れた芸術品として扱う者もあり、キネスシスの名は瞬く間に世界中に広まった。

ところが、話はこれでは終わらなかった。むしろ、ここから始まりといっても過言ではあるまい。

とある一人の剣士が、彼の打つ最強の魔剣を欲するがあまり、彼とその家族を狙って災厄として襲い掛かった。なんといつても『魔』の、『剣』、である、剣士は彼の打つ魔剣の魔力に完全に毒されてしまっていた。

結果は無残なものだった。惨劇と呼ぶにも生ぬるい。キネスシスの家族は皆殺しにされ、彼の心もまた、同時に壊された。キネスシスは己が魔術をはじめて外に向けて発し、その剣士を八つ裂きにした。

ここまでで、序破急の序。惨劇はまだまだ終わらない。

彼は全てを呪い、憎み、絶望した。そして、世界に復讐すべく、残る生涯全てを費やして、一つの剣を造り上げようとした。しかしそれでキネスシスの家族が帰ってくるわけでもない。妄執に憑かれ、憎悪に冒され、怨嗟に慟哭し、絶望を渴望した。幾年もかけ、彼はこの世の全ての絶望を体現した剣を造ろうとして、ひたすらに探求を続けた。悪魔的なその腕と天才的なその魔術の才が災いして、その渴望が受肉する。彼はとうとう、神と呼べるに足る領分へと足を踏み入れたのだ。そうして、一振りの剣が産み出される。邪神と化

した彼の命全てを擲って造られたそれは、最早人造のものではなく、神造のものだった。

これが、『神剣』の誕生である。

そうして絶望により造り出された神剣が、世界に何の影響も及ぼさないはずがない。《たった一本の剣によつて、世界は災厄に包まれた》。法も秩序も、善も悪も、男も女も老いも若きも分け隔てなく、瞬く間に世界に渦を巻く混沌。それを食い止めるべく、世界の秩序を護る自然の存在、いわゆる『精霊』もまた、剣 精剣を造り出し対抗した。それでも、その神剣が及ぼす被害の火は止まることがない。精霊は神へと祈りを捧げ、神々もまた、手ずから腕を振るい『神剣』を造り出す、という終わることのない負のスパイラル。ようやく災禍を封じ込めた時には、魔剣も精剣も神剣も、多く人間界に散らばり、数多の人々の手に渡つた後だった。その魔性に吞まれ、剣豪だけでなく、蒐集家として、あるいは己が富や栄華を分かりやすく示すために多くの人間がそれらを求める時代が幕を開けた。苦肉の策として、ギルドが《剣そのものに褒賞金をかけ》、？賞金剣？という概念が生まれる。結果として、それは更に事態を加速させることにしかならなかつた。巨万の富を、または無類の栄光を追い求め、剣士ではない戦士やゴロツキ達もその流れに乗つて、世界中が賞金剣を追い、求め、狙い、奪い、集め、欲し、果たし合う。

ここまで来ると、最早ブームどころではない。

維新、だ。

言うなれば、今世界は『賞金剣維新』。ただ一人の人間の悲劇から始まつた途方もない規模での維新。世界中の人々は、ただ一人の例外もなくその渦中にあるといえた。

賞金剣維新譚

始

第一部 賞金剣維新（後書き）

第三回GA文庫の二次選考を通過した作品です。勝手ながら続編も考えてあるので、機会があれば書いてみたいと思います。どうぞ長らくのお付き合いをお願いします。

第二部 代行纂奪者（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第二部く代行襲奪者

*

正確には。

純白の少女は、続ける。

「？神を殺す？って言っても、正確には？殺す？んじゃなくって？
還す？んだけどね、神界に」

「……？還す??」

「そう。あたしの父親　まあ神なんだけどさ　が人間界に神剣
がこんなにも溢れているのを憂いていてね？　『あかん。人間界あ
かん。このままやとあかん』って言ってあたしに神喰^{これ}渡して人間界
に飛ばしてきたのよ。『これで神剣回収してきてえな、頼むでえホ
ンマ』って。我が父ながら無茶振りこの上ないわ」

……神が、関西弁を喋るのだろうか。

そんなことより、今の台詞を額面通りに受け取って紐解くに。

「君は……神なのか？」

「そうよ？　ああ、っていつても別に崇め奉ったりしなくていいか
ら。神格も何もないひよっこ神だから」

そう言われると、唐突に俺の上から降ってきたことも、人外の美
しさを持つているような感覚も頷ける。

うまく言えないが……その存在感が凄まじいのだ。目の前に立っ
ているだけで他者を圧倒する不思議で不可思議なオーラを放ってい
た。

「だからあたしは、言うなれば『神剣返還神』とでも言ったところ
かな。で、この神喰は、剣の形こそしているものの、その実態は人
間界から神界へと繋がる？門？を開く鍵。だから、正しくは『神剣』
ならぬ『神鍵^{しんけん}』とでも呼ぶべき存在なのよ」

「……どうして、俺にそんな説明をする？」

一番訊きたかった質問を、ようやくすることができた。さっきか

ら彼女の雰囲気の呑まれっぱなしで時機を逸していたのである。

その問いに対して少女は、何を今更、とでも言うかのように口を開く。

「決まってるでしょ。あたしのパートナーになってもらうからよ」

「パートナー？」

「神が人間界で現界するには、人間界での協力者が必要不可欠なのよ」

「却下」

「ありがたく思ってたよ、『神剣返還神』の相棒として相応しいに足る実力を持っている、って、おにーさんは認められたんだから」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ばーどうん？」

「どうやら神界にも存在するらしい。」

「ノリツッコミというものは。」

「断ると言っただ。俺はそんなに自分の力に自信を持っていないし、そんな面倒事は御免被る」

「もつと言っなら。」

俺はもう、『神剣そのもの』に関わりたくなかったのだ。

（ ……それに………… ）

性格はまるで異なるが、よくよく見てみれば彼女には…………妹シメテの面影があるのだ。

俺がこの手で殺した、たった一人の肉親の。

「俺は剣になんて興味がない。他を当たってくれ」

「そう残してその場を後にしようとして…………。」

「『剣になんて興味がない』？ 嘘ね、『あんなにも華麗な足捌きを見せておきながら』剣に興味がないだなんて。嘘八百にも程があるわ」

「貴方はさつき、私の一斬を反射的に《躲そうとした》。刃渡りがあと一尺も短ければ、完全に回避できていたはずよ。あんな動き、剣に対して深い知識と造詣がなければできっこない」

あの一瞬で、あの一閃で……そこまで見抜いていたのか。

確かに、さつき彼女に斬りかかられた時、俺は咄嗟に後方に回避しようとした。あまりに長い刃のせいで、完全に躲し切ることはできなかつたが、勿論、少女の剣技の一閃がとんでもなく速かつたということも無関係ではないけれど。

「それにね、あたしは神界から無作為転移を行ったのよ。『人間界で最も強い剣士のところに転移するように』という設定をかけてね、転移先が空中だったっていうのは、ちょっとした誤算だったけど」

最も強い剣士。

最強の、剣士。

俺がかつて欲しいままにした、『最強』『天才』『神童』『剣聖』などの栄冠の数々。

だが今となつては。

(そんな栄冠^{もの}、忌まわしいだけだ)

「なら、その設定そのものにも誤算があつたんだろう。見ての通り、俺は《剣を持っていない》。剣士なんかじゃ、ないさ」

言い聞かせるように、そう言った。

誰に？

彼女に？ それとも……。

自分に？

「ふうん……」

と、少女は意味ありげに呟いて。

「成程。この時代の中で剣を持っていないっていうのは極めて異端なことだけれど……その《懐に隠している物が》、貴方の武器って

「いうわけ」

「ガァン！」

乾いた音が響いた。

少女の足許、左爪先の一、二センチ手前に、小さな穴が穿たれていた。

俺が咄嗟に懐から取り出した？それ？が、火を吹いたのだ。

「……満足か？」

眼光に殺気を織り交ぜつつ、俺はまだ名も知らない少女に？銃口？を突き付けた。

「他人の内面を見透かしたように見抜き通して。上から目線で偉ぶって。？俺の武器？を目にして、まだ満足できないか？」

一陣の風が、啼く。俺と少女の間を吹き通って、彼方へと消えていった。

「おお怖い怖い。分かったわよ、そう露骨に殺気を見せないで。つまりは私に協力してはくれないってことね？」

怖い、という言葉とは裏腹に、どこまでも飄々とした態度を崩さないまま、少女は言った。

俺は無言で踵を返す。この女は気に食わない。神とはいえ、人を食ったような態度といい発言といい、ソニアに似た外見といいとにかく気に食わない。もう言葉を交わすのもうんざりだった。

背を向けて、一步を踏み出す。「どこ行くの？」と、少女は未だに食い下がってきたが、無視する。

また一步。

「ねえ、どこへ行くの？」

尚も食い下がる。声の聞こえた位置から察するに、後を付けてきているようではないらしいが……。

「ふう……」

俺はわざとらしく 彼女に聴こえるくらい大きなため息をこぼして、すっかり辟易した感情を隠そうともせず、仕方なくこう答えてやった。

「仕事だ」

*

ダーティワーカー。

それがこの俺　レイリア・グローテックの、いつからか付けられた別称であり蔑称だった。

俺はとある山に訪れていた。カトレア山。クライアントの情報通りなら、ここに？ターゲット？が存在するはずだ。まあ、クライアントの情報はあまり当てにならないので個人的にも調べておいた。間違いはないだろう。

あつてないような入り口から山に入り、ろくに舗装されてもいないぬかるんだ道を歩く。盗人ではないので　結果としては盗人になるケースも少なくないが　わざわざ木々の合間を縫うように進んだり気配を消したりはしない。堂々と山道を進むこと十数分。

その男は。門番のようにそこに立っていた。

肩から先の袖がない装束。胸の辺りに楕円が描かれており、そこから八本の線が伸びている　あたかも、蜘蛛のように。下半身は丈夫な布製で、足周りはこれまた丈夫ななめし革のブーツを履いている。腰からはご多聞に漏れず剣を提げている。

下調べのままだ。この山を拠点とする山賊の、統一された衣装。

「その男。止まれ。ここが我ら『土蜘蛛』の縄張りだと知った上での侵入だというのなら、その命なきものと思え。このまま引き下がるのなら、五千払えば命だけは助けてやろう」

安い台詞だ。

心底そう思った。いかにも下っ端然とした台詞に、俺は思わず失笑する。まあ、素直に追い返さずに金銭を要求するあたりは、しっかりしているとかちゃっかりしているというか。

「……ああ、知っているとも」

俺は足を進める　言うまでもなく、前に。俺が用があるのは、少なくともこんな下っ端ではない。

したがって。

「ここが、不様に地を這いずり回る薄汚い虫けらの群れの縄張りだ
つてことは、な」

「っ！ 貴様！」

安い台詞を言う奴は、安い挑発にも簡単に乗る。男は腰から剣を
抜き、構えも何もないまま俺に向かって斬り掛かってきた。

何の技も力もない、単純で一直線な斬撃。それを必要最低限の力
で横に躲して、反撃に出る。《気を失わない程度に手加減した上で
《鳩尾に膝を食い込ませ、男は苦悶の表情を浮かべて「うっ……！」
という呻き声を上げると同時に、手から剣を落としてその場に倒れ
伏す。

カラン、と地面に落ちた剣は、何の面白味もない純粹な洋剣^{サーベル}。そ
こそこの名のある刀工の作品という可能性もゼロではないが、今の俺
にとっては欠片も関心を向けることができない駄剣だった。

俺はその剣の刀身の中心に足を振り下ろす。何の加工も施されて
いないそれは、呆気なく真つ二つに砕け散った。その隙を見て、倒
れ伏した男は呼子を吹く。その隙その行為が、俺の恣意によって
移されたものだとも知らずに。ピイイツ！ と甲高い音を立て、
山内に呼子の音が木霊する。

(上々だ)

これで、この場に山賊連中が集まるはず。比較的小さな山とはい
え、闇雲に標的を探すには流石に広すぎる。だが、呼子の音を聴き
付ければ、奴らはここにやってくるだろう。全て計算通り。

用済みになった門番の男の延髄に手刀を叩き込んで、気絶させる。
命を奪いまではしないが、別段情けをかけてやったわけでもない。
取り立てて殺す必要性を感じなかっただけだ。

数分して。十人弱の男達が一斉にその場に現れた。全員『土蜘蛛
の衣装 蜘蛛を模した袖のない装束を身に纏っている。予め集合
場所を決めておいたのだろう、いずれもが剣を抜き構えて臨戦体勢
を取っている 剣の種類は、彎刀^{レイピア}であったり刺突剣^{レイピア}であったり、

様々だが。

否。

一人だけ、手に剣を持っていない男がいた。一番後ろで偉そうに腕を組んでふんぞり返っている、いかにも山賊然とした体格の良い白髪混じりの男だった。

「……お前さんは」

その男が、口を開く。

「おれが持つ、この『グランドスラム』を狙ってやってきたのか？
そう言って。」

男 山賊の頭は、鞘に収まった一本の剣をかざした。

『グランドスラム』。土精の加護を受けた、キネスシスが造りし後期の精剣。地表を自在に操る、という触れ込みであり、ギルドでも高い額がついている。

そして……今回の俺の、ターゲットである。

「ああ、そうだ」

隠す必要もない、俺は頭の問いにイエスと返す。

「無駄な抵抗を止めてそれを渡せば、俺もこれ以上戦闘を望まないが？ 勿論、相応の金額は払うぜ」

形式上の発言を受け、不愉快そうに眉を顰める一同。当たり前だ、突然やってきた、どこの馬の骨とも知れない奴に渡すくらいなら、普通にギルドに売って金に換えているだろう。

「随分と礼儀知らずな野郎だな、てめえは。それとも物知らずか、あるいは命知らずか、はたまたただの莫迦か。今置かれてる状況を分かってんのか？ 何人もの男に囲まれて、対するお前は見たところ丸腰。どう考えたところで、ここでおれが首を振るわきゃねえよな」

……だろうな。

そう思うだろうな、《今は》。実際、これまでのターゲットも似たり寄ったりな台詞を口走ってきた。

俺の名前を、耳にするまでは。

「やっちまえ　　！！」

待っていましたといわんばかりに。

その言葉を皮切りに、周囲を取り囲んでいた山賊達が一斉に飛び掛かり、斬り掛かってきた。

(……なつてないな)

俺は失望する。数が多ければ勝つとでも考えているのか。多対一という戦い方を、まるで弁えていない。

迫る刃の群れ。縦横無尽四方八方、煌く無数の剣尖が俺を襲う。

(七本　　！)

その総数を見極めて、今度は《どの剣が最も優れているか》を把握する。力や速さや技量、そしてその軌跡。それらを総合的に鑑みた上で、最も秀で優れている刃は　　。

(　　これだ！)

右方斜めから斬り掛かってくる一本の刃。俺はそれに狙いを定め、その剣を操る男に向かって体勢を低く一気に肉薄する。

「なつ……！！？」

刃と刃が交錯する、その刹那。男達が示し合わせたかのように声を上げるが、時既に遅し。剣は既に完全に振りかぶられ、最早寸止めすることも叶わない。そして、振るわれたその先に俺は、いない。

つまり。縦横無尽四方八方から振るわれた刃は、勢いを殺すこともベクトルを変えることもできないまま、《同志討ち》を起こす

！

後方、さっきまで俺が立っていた場所から、肉を切り裂く音が聞こえた。ある程度の力量があれば即死は免れるだろうが、ひとまずこの六人は後回しだ。まずは俺が狙った男を確実に仕留める。

「くっ！」

男の顔が憎々しげに歪む。高速で間合いを詰められたそいつは更に力を籠めて剣を振るうが、事ここに至って戦闘は多対一から一対一に変わっている。俺を止めるのに、それはあまりにも無力な抵抗

だった。

袈裟掛けに薙がれた剣刃を、俺は頭が地に着くくらいまで身を低くして躲す。頭上で刃が空を斬る音が聴こえた。

その瞬間、である。

速くても遅くてもいけない。速すぎれば目測を誤って剣先が当たるし、遅すぎれば相手に体勢を立て直すだけの猶予を与えてしまう。故に、瞬間。重心を低くした身体を一気に持ち上げる。全ての圧力を右手の甲に籠め、俺は男の下顎を狙い打つ！

鈍い手応え。下から上へと発せられた裏拳が男を的確に捉える。しかし、いくら威力を殺された。咄嗟の判断で顔をのけ反らせた男はわざと後ろに跳び、ダメージを軽減させたのだ。それでも、眩暈くらいは約束された。ならば十分。俺は拳を素早く戻し、回転を混ぜた蹴りで、男を吹き飛ばす。無力化には 一時的にはあるが 成功。

その間に、俺はさつき見限った後ろの六人に意識を向ける。何人かは深々と同朋の刃が突き刺さり派手に出血を起こしているが、残る数人は、傷こそ負っているものの、まだ威勢が残っている。

すぐさま俺は駆け戻り、残党を狩り尽くす。右の拳で後頭部を殴って昏倒させ、左の掌底で側頭部を殴って昏倒させ、右膝で顎を突き昏倒させ、左蹴撃で脇腹を蹴り上げ、近くの木に激突させ、昏倒させる。

頭の「やっちまえ ！！」からここまでで、およそ三秒。瞬殺と称して差し支えはないだろう。

瞬殺になった理由。

それは俺が強いからでもあり。

連中が弱すぎるからでもあり。

何より、戦い方がなっていないからである。

多対一であった戦闘を、俺が強引に、一対一の戦闘になるように《持ち込んだ》からである。流石の俺も、素手で一対一を六連戦は厳しいが、この程度のことならば、造作もない。

俺はさっきまで立ち会っていた男に向き直る。ようやく倒れていた身体を起こしたところだった。

「てめえ、やるじゃねえか。油断してたつても勿論あるだろう、そこを否定はしねえ」

そう言つて、ぺっ、と唾を吐き捨てる。その中には血も混じっていた。口内を切つたのだろう。

「だがな、こうして面と向かえば、こっちは剣、てめえは素手だ。どっちが有利かは、分かつてるよな？」

「……………」

長々と口上を並べる男は 自分の力に余程の自信を持っていると《勘違いしている》のか 己が置かれている状況も、俺も見えていない。緩慢な動作で懐に手を伸ばす、俺の姿は。

「この剣も、無銘つてわけじゃねえが……今は伏せておこう。代わりといつちやなんだが、名乗りは上げておこうか。おれは土蜘蛛副頭りよ」

ガァン！

乾いた、銃声。

俺は男 どうやら副頭領だったらしい に向けて、容赦なく引き金を引いた。

問答無用で。

顔面に向けて。

撃ち殺した。

斬り捨てならぬ 撃ち捨てた。

銃弾が頭部を貫通し、副頭領は呆気なく即死した。

「…………お前じゃないんだ」

俺が狙っているのは、少なくともそんなナマクラじゃなく。

後ろで未だに腕を組んで佇んでいる頭領の持つ グランドスラムである。

「…………それが」

頭は。

夥しい量の血液を顔面から流して斃れた副頭領を一瞥し、俺に向き合う。

「てめえの武器かい？ 《銃使い》」

「そうだ」

俺の武器。

それがこの銃 回転式拳銃『ウインチエスター』である。

この維新時代の中では、俺のような銃使いは極めて異端だ。

理由は大まかに分けて二つ。

剣を振るうだけの才能が、なさすぎるか。

剣を振るうだけの才能が、ありすぎるか。

俺の場合 後者、《だった》。

もつとも、それをこの場で教えるわけには、いかない。

「ははあ、お前さん、さぞかし剣士として出来損ないだったらしいな。だから銃を使うことにしたってことだろ？ てえことは、お前

さん、蒐集家コレクターか？ 確かに銃使いは珍しいからな、意表を突ける」

このように、勘違いを狙った方が有効な戦術というものだ。

「ただしなあ、今はおれみたいに剣使いが主流なんだよ。昔は『銃は剣よりも強し』なんて格言もあったみてえだし、確かにおれが産まれた頃には銃が主流だったが……この時代に於いて、そんな考えは通用しねえ」

そう言つて。

頭領は、グランドスラムの柄に手をかけた。

「だが、おれはお前さんの実力を、体術を見ていた。大したモンだ。敬意を表するぜ。……だから、最初から出し惜しみなしで、コイツを使わせてもらう」

そうして、グランドスラムを抜刀する。初見となるその刀身は果たして。

石製、だった。

長さは一尺程度、成程、あの一般的な長さの鞘はフェイクだったというわけか。統一性のないさざれ石のような色彩、否、石彩。か

と違って、そこに見苦しさや醜悪さは一切感じられない。あたかも、
《統一されていないことが統一されているような》 見る者を魅
了する、芸術的な剣だった。流石はキネスシスの作品、といったと
ころか。

「……なにブツブツと呟いていやがる」

「おっと」

いかん、また癖が出ていたようだ。長いこと矯正しようとは思っ
ているのだが、それでも抜けないから癖と呼ぶだろう。

我ながら困ったものだ。

「コイツは本当ならおれの切り札なわけだが……てめえに対しては、
最初っからマジでいかせてもらっせー！」

頭領はそう叫んで。

グランドスラムの刀身を 地面に突き立てた。瞬間。

腹に響く低い地鳴りを立てて、大地が隆起する。ボゴンボゴンと
音を大きく立てて、次々に隆起していく無数の土と石と砂利。それ
はまるで、大地の波濤。俺目掛けて一直線に波が伸び、襲撃する。

これが、土精の加護を受けし精剣『グランドスラム』の能力
か！

俺は土の波をサイドに躲して、ウィンチエスターの引き金を右の
人差し指で引き、左の親指で撃鉄を下ろし更にもう一発叩き込む。
連射。^{ファイナック}ウィンチエスターはかなり旧式のリボルバーなので、一発ご
とに撃鉄を下ろす必要があるシングルアクション式なのだ。

コンマ五秒の間もなく撃ち出される二発の銃弾。それをしかし。

「あめえ！」

頭領はすぐさま引き抜いたグランドスラムでそれを凌ぎ切った。
なかなかどうして、見事な剣捌きである。短い刀身とはいえ、完全
にグランドスラムをものにしてている。

俺の反撃を受け、更に今度は頭領の攻撃。再びグランドスラムを
地に突き立てたかと思うと。

「おお……らあっー！」

刺した剣を振り上げるようにやや前上方へと引き抜いて、すると土の地面は大岩のように固まり、宙を舞う。直径二メートル程度の岩石となったそれは、俺の頭上から降り注ぐ。

俺はそれを破砕すべく、銃弾をファニングで連発する。一発、二発、三発

(っ !?)

だが、三発目の銃弾が発射されることはなかった。二発は既に岩石に命中して大部分が砕かれているものの、いくらか礫は残っている。

(莫迦な)

ウインチェスターの装填数は六発。一発を副頭領に撃ち込み、先程と今回で二発ずつ、あと一発残っているはずなのに。

(!)

しまった、失念していた。一発はこの山に登る前に出会った純白の少女への牽制に、使ってしまったのだった。再装填するのを忘れていた、つまりこれで合計六発を使い切ってしまったということ！

「ちいっ！」

俺は咄嗟に纏った外套を脱ぎ去り、翻すことで降り注ぐ石礫の雨を防ぐ。流石に二発では粉々にはできなかつたので大きなものも混ざっている。それらは隙を見て回避することに成功した。

更に次の瞬間。俺は頭領に向かって疾走していた。ここでリロードしている時間はない、グランドスラムを地面に突き立てる余裕も与えず、近接戦で一息かつ確実に仕留める！

グランドスラムは石製だ、切れ味はないに等しい。ならば、体術のみでの戦闘になる。そうすればあとは力任せでどうとでもなる、というのが見立てだった。

だがしかし。結果的にそれは失敗に終わる結果となった。

頭領は、グランドスラムを頭上へと振りかぶった勢いそのままにまるで俺の動きを先読みしていたかのようにそのまま重心

を後方に移していたのだった。片足を浮かせ、肉薄した俺の顎を蹴り上げるかのようにサマーソルトを繰り出したのである。

「っ
」
速すぎたのが逆に災いした、急制動をかけ、その蹴撃をすれすれで回避する。急激な体勢移動のせいで脳が揺れ、軽く吐き気を覚えた。

頭領はそのまま後方宙返りをし、無事に着地していた。奴は、グランドスラムの特性をよく理解している。短いということは、即ち軽いということである。通常の刀剣使いならば、剣の重量が足枷になって、あんなにもアクロバティックな動きはできないだろう。

対峙する俺と頭領。その距離はおよそ六メートル。

「やるねえ、今の蹴りを躲すとは」

頭領は飄々と、俺へ贅辞の形骸を放つ。

「ま、今のご時世だ。グランドスラムコイソにばかり目が行っちゃうのは分かる、分かるんだぜ？ だがな、そりゃあとんだ盲点ってやつでな」

「……何が言いたい」

「つまり、だ。おれの《？首？にも》賞金がかかってるってことだよ」

その男は。

自信満々の口振りで、そう言い放った。

賞金首。

確かに今の時代には少ないが……皆無というわけではない。

成程、グランドスラムを振るうに相応しい力量を、持ち合わせてはいるということか。
「ギルドで『九十九つくも』って検索してみな。魔剣一本分くらいの金額はついてたはずだぜ」

値下がりしてなけりゃ、いいけどな。

続けてそう言い、下品に笑った。

「だがまあ、てめえはもうギルドに行くこともねえか。なにせ、こ

「ここでおれに殺されちまうんだからな
すう、と目を細めて。」

山賊集団『土蜘蛛』頭領・九十九は。俺という賊に向けて、全身から殺気を放出した。

「うちの縄張りを散々荒らしてくれやがった罰だ。相手が悪かったと思つて諦めな　！」

怒気を孕んだ声を荒げて、九十九はグランドスラムを振りかざす。そして、初手と同様、その石製の刀身を地面に突き立て

「　ああ。確かに、相手が悪すぎたよ」

俺は《弾切れの銃口を相手に向けて》。

「お前がな」

グランドスラムがまさにその真髓を發揮する瞬間に。

「　木弾もくだん」

魔言と共に。引き金を引いた。

轟とん、と爆風が吹き荒れる　《一直線に》。風の弾丸が、隆起する

地面に命中するや否や、大地の波濤は瞬く間に脆くも霧散した。

「え……な　」

何が起こつたのか、まるで分かっていない様子の九十九。グランドスラムを突き立てた状態のまま硬直し、俺と、俺を襲うはずだった大地を交互に見やる。

そんな絶対的な隙を、俺は見逃さない。

六メートルの距離を跳躍し、一気に接敵する。上段から踵を振り下ろし、九十九の頭を土の地面にめり込ませた。

「　っ！　」

土に頭を埋めた九十九。おかげで悲鳴はくぐもつて聞き取れなかったが、気にせずの後頭部を片手で掴み上げ、引きずり起こす。更に連携で鳩尾に膝、とどめに三百六十度横に螺旋回転を描いた回し蹴りを繰り出す。ほぼ同時に行われた三連打撃。九十九は砂利をま

き散らせつつ不様に転がった。

「……五行、って知ってるか？」

俺はさつき防御に使ってすっかり汚れた外套の砂を払い、羽織り直しつつ言った。

「木火土金水、って言ってな。世界を統治する精霊達も、大別すれば全てこの五大属性の魔力から成っている。その精霊達からの魔力供給を得られてこそ、魔術だ」

一つ極めれば世界に、二つ極めれば時代に認められ。

三つ極めれば時代に、四つ極めれば歴史に名を残す。

一般的にそう言われているのが、五行の魔術である。

「キネスシスはこの五行全てを極めていたらしいな。《俺と同じように》」

「き、貴様、まさか……！」

砂利と一緒に、呻き声を発する九十九。

木が火を生み、火が土を生み、土が金を生み、金が水を生み、水が木を生む。これが相生。

木が土に剋ち、土が水に剋ち、水が火に剋ち、火が金に剋ち、金が木に剋ち。これが相剋。

「お前の持つグラウンドスラムは土属性。そこに木属性、即ち？風？をぶつけてやれば、土は呆気なく《無力化される》」

「だ、『代行篡奪者』……！？」

五行の魔力を弾丸に変え撃ち出す。

それこそが、『代行篡奪者』レイリア・グローテックが誇る切り札『五行弾』である。

魔力で編む擬似的な銃弾であるが故に、魔力が枯渇しない限り、実質弾切れの心配がない。つまり、敢えて弾数制限のある実弾銃を使用しているのも、俺にとっては手の内を秘匿するためのフェイクに過ぎないのだ。

目的のためなら手段を選ばず。卑怯卑劣を躊躇せず。相手に対して情けをかけず容赦をかけず。確実に標的を実力行使の問答無用で

篡奪する。

故に、ダーティワーカ汚れ役。

「ま、参った……おれの負けだ。ぐ、グランドスラムは譲る。だから頼む、命だけは……」

地を這いずり回って、赦しを請い命を請う。

まさしく、不様な蜘蛛の成れの果てだった。

「ああ……」

俺はゆっくりと銃口をそちらに向け。

「確か、《お前の首にも賞金がかかっているんだったな》。そちらは依頼されていないんで、臨時収入ってことで頂いておこう」

先程自身で発した言葉が。

彼本人の、墓穴を掘った。

「かたん火弾」

ウインチエスターが、火を吹いた。

比喻でも誇張でもなんでもなく、文字通り銃口から炎が噴射されたのだ。

「あ、あああああああああああああああああ！！！！」

紅蓮の炎に抱かれ、火だるまになる九十九。咄嗟にのたうち回っても、魔力によって形成された火は物理的な手段ではそう簡単に消えはしない。

だが、火から生み出された土属性の精剣グランドスラムは燃えることなく大地に突き刺さったままである。あたかも、墓標のように。

俺はそれをひどく冷めた感情で見つめ続けて。

やがて残ったのは、動かなくなつた人間大の炭の塊と、かの精剣だけだった。

第二部 代行襲奪者（後書き）

レイリアの真骨頂発揮です。腐っても鯛、レイリアさん、マジパネエっす。とりあえず起承転結の『起』と『承』の中間くらいですね。今後にご期待！

第三部 安寧禁忌（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第三部 安寧禁忌

そもそも。

*

世に言う戦士達以外が、どうやって賞金剣を手に入れるのか。

方法は三つあるのだが、それを説明するためにはまず、ギルドと賞金剣についての説明をせねばなるまい。

今日、多く賞金がかかっている？剣？。これらは？首？と違い、ただ単に破壊すればよい　というものではない。賞金のかかっている剣は、世界各地に存在するギルドが有する『所有庫』^{クローク}と呼ばれる保管庫に渡し管理されて、はじめて金に換わるのである。クロークの所在地は各国家の要人レベルにならなければ知らされることなく、その護りは強固にして盤石、しかしそれでも、世間に出回る賞金剣の数は少なくなるどころか年々増えている。

何故か。

それは、クロークを管理する管理人もまた　人間であるからだ。神剣クラスの剣にもなれば、一本で世界を変革させるほどの価値と力を持つ。故に、管理人もその金や名誉に目が眩み、魔が差して強奪することも決して少なくない。管理人の選抜には、念には念を入れておらずなのだが、それでも後を絶たないことから、賞金剣維新の規模の大きさが計り知れるというものだろう。

ともかく、賞金剣は基本的にギルドが管理しているため、所有権はギルドにある。だが、一定の条件を満たせば、その限りではない。その条件とは、本来の賞金の1.5倍の金額を提示すれば、所有権がその者に移る、という制度である。つまり、賞金剣を《買い取る》のだ。金に糸目をつけない蒐集家達は、この制度を用いて目当ての剣を蒐集している。

これが、一つ目の方法。

二つ目が、その時々所有者から《盗む》というシンプルな手段。

ただしこれでは、所有権はギルドにあるままなので　付言するならば、再び盗み返されるといふあまりにも大きなリスクがあるので　実行に移されることは稀だ。

三つ目が、最も確実かつ単純な手段。奪うという方法である。しかし、単純ではあるが、否、単純であるが故に、力のない者が自力で手に入れることは不可能ことに近い。当然だ、えてして賞金剣の所有者は、その所有権が自分にあると思っているので、ひとたび奪ったところで自らの手許にそれがあ限り、元の所有者とギルドの双方を敵に回すことになり、危険度は増す一方なのだから。

そこで、だ。俺は『代行篡奪者』という肩書きを自称し、力のないクライアントの依頼を受け、本来かかっている賞金の1・8倍の金額を報酬としてクライアントの手となり足となり、《篡奪を代行する》、という荒業を考案した。依頼の品を標的から奪い、一度クライアントに渡した後で、クライアントがギルドと交渉し、買い取る。そうすれば　金は三倍以上かかるが　所有権はクライアントのものとなる。

二年前、この職業を生業とし始めた俺に依頼する者はほとんどいなかった。いたとすれば、それはもう藁にも縋る思いだっただろう。さもありません、金を頂戴して裏切れば、剣も金も、俺のものになるのだから。だが今現在、俺は多くの《お気に入り》のクライアントを抱えている。

何故か。

それは俺が、《剣を振れないから》、である。剣を振れないから裏切られることはないし、金さえ払えば確実に手に入る。金にしか興味がない、成功率百パーセントを誇る絶対の篡奪者レイリア・グローテック。いつしかその名は口伝で世界各地へと伝わり、『代行篡奪者』という悪名は、賞金剣を持つ人物にとっては天敵のようなものへとなりつつある。　もっとも、俺がどういった経緯で剣を奪うかは、一切明かしてもいないし明かされていない。よもや銃を使うなど、誰一人として考えもしないであろう。故に、《『代行篡

奪者』が銃使いであるなど』、この時代に於いては盲点以外の何物でもないのである。

天敵であると同時に。

天災でもあるのだ。

これが、『代行篡奪者』の、『表向き』の事情。

俺の本当の目的は、もっと別のところにある。

俺は突き刺さったグランドスラムの柄に手をかけ、地面から抜き去る。

「…………ちっ」

腕が…………震える。

震えて、震えて、どうしようもなく。どんなに力を入れても、止まってくれない。

これも…………駄目なのか。

仕方なく、俺はそれを懐に仕舞い、クライアントの元へ届けることにする。幸いにして、グランドスラムは脇差以上に小振りなので、外套の中に簡単に収納できる。

と、そこに。どこからともなく拍手が聴こえてきた。

「いやぁお見事お見事。流石はあたしが見込んだだけのことはあるわ」

その声は、頭上から届いた。更に言うなら、その人を食ったような口振りや鈴のように鳴る声に、俺は聴き覚えがあった。

「…………盗み見とは、随分と高尚なご趣味でいらっしゃる」

「まああたしもなんだかんだで神だし？ 高尚なのは当たり前ですよ」

俺の嫌味も華麗にスルーして、木の枝から飛び降りてきたのはあの少女。純白の着物に身を包んで、漆黒の神剣・神喰を持つ、あの少女だった。その神喰はというと、抜き身のまま袈裟掛けに背負っている。とてつもなく長い刀身なので、少しかがめば地を擦ってし

まいそうだ　もつとも、あの剣で物質は斬れないんだっただか。

「やっぱり強いんじゃない、おにーさん。無作為転移もあながち的外れじゃなかったってことね」

「……どこから見ていた？」

俺が銃使いであることは仕方なく晒したが……、俺が『代行篡奪者』であることを知られるのはまずい。ましてや、切り札である『五行弾』を使うところまで目撃されていたとあっては、今後の仕事に支障をきたす。俺は早々にこの少女の口を封じるべきだと考えていた。

「最初から、って言ったら信じる？」

しかしながら少女はどこ吹く風。あくまでも不敵、どこまでも無敵な笑みを蓄えたまま飄々と言い放つ　俺の殺気を歯牙にもかけずに。

「いくら神だからってな、俺だつて打つ手なしっていうわけじゃないんだぜ？　その気になれば無力化させることだってできる、……あんまり俺を怒らせるなよ」

五行の精霊の加護を全て受けた俺は、本気を出せば神でさえも封じ込めることができる　それくらいの自信はある。ましてや、相手は神格も何も無いひよっこ神　自称。不死という概念を持つ神を殺すことはできなくとも……口封じくらいなら可能だろう。

現に……俺は一度、神剣を完全封印することに成功している
《とということになっている》。

それでも、少女は態度を改めない。

「分かったわよ。貴方の能力に関しては一切他人に言いふらしたりしないって約束する。代わりに」

「手を貸してくれ、っていうのはなしだからな」

「むう……」

どうやら凶星だったらしく、少女は唸った。先回りされたのがそんなに面白くないのか、子供のように頬を膨らませている。

彼女は気付いているのかいないのか、現実問題、圧倒的優位に立

「もっと根本的な目標よ。あるでしょう、貴方には。　　？生きる？
つていう大切な目標が」

「いや、それを忘れたことはねえよ！」

「……おかしい、俺はこんなツッコミキャラじゃなかったはずだ。
くそ……、どうもこの女を前にすると調子が狂う。」

俺は踵を返す。

「付き合いきれん。俺が忘れちゃいけないのは、仕事をしつかりと
終わらせることだ。お前みたいな奴の世迷言にいちいち構っていら
れるか」

「はあ……しょうがないわねえ……。分かったわよ。協力は諦める」
これまでの話のどこに？生きる？ことが含まれていたのか分から
ないが……とにかく、どうやらようやく諦めてくれたようだ。

「じゃあさ」

しかし、まだ少女の食い付きは続いていた。俺は完全に背中を向
けた体勢でそれを聴いていた。

「一個だけでいい。あたしに情報をリークしてくれない？ さつき
から気配を張り巡らせて回っているんだけど、一向に見つからなく
て困っているのよ」

「それで、妥協しようって言うのか？」

「ええ。協力者は別に探すとするわ。勿論、情報を知らなかったか
らって貴方の能力を言いふらすようなことはしないから、安心して
頂戴。……でも、おにーさんは色々知ってそうだからちょっと当て
にはしているのよ」

俺は少し逡巡して。

「……いいだろう。俺が知っていることなら一つだけ、答えてやる。
それで君との関係を清算できるっていうなら、な」

その俺の返事に満足したようで、少女は口調に真剣さを宿し。

「『^{バンドラアーツ}安寧禁忌』っていう神剣、知らない？」

全身で唯一赤い唇を開いて、その名を口にした。

「
」
思考が、凍結する。

どうして……その名を？

「って、知らないわけないわよね。かの刀鍛冶キネスミスが造りし、人造でありながら神造、原初にして最悪の神剣。この維新時代が始まるきっかけになったのはた迷惑な剣よ。とりあえず、まずはそれを返還するよう、あたしは遣わされたわけなんだけど」

はあ、と。ため息を一つ漏らして。

「二年くらい前に、急に気配が消えたのよ。おかげで行方が分からなくなつて困つていたんだけど、つい先日あたりから再び気配をちらほら感じるようになったの」

「な……に？」

そんな莫迦な。

パンドラアーツは。あの剣は。

「莫迦な……、《あれは封じ込めたはずだぞ》……！？」

「はい？ ……って、近い近い近い！」

俺はいつの間にか少女に詰め寄り、その胸倉を掴み上げていた。純白の着物が着崩れる。

「あれは、封印されたはずだ！ 完全に封じ込められたはずだ！

もう二度と蘇ることなんてない！ 冗談もほどほどにしる！」

「ちょ……おにーさん、落ち着いて……おち」

「俺が今こうして俺として生きているのが何よりの証明だろう！ あれは封印されたんだ！ 今になって復活するはずがない！」

自分でも、何を言っているのかよく分からない。ただ、思い出すのは妹の顔。俺の命と心を救ってくれた、俺が殺した妹の。

早口で、捲くし立てる。

狂ったように、言葉を紡ぐ。

ただ、そんなはずはない、と。

「……いい加減に」

「え」

一瞬の出来事。

何をされたのかは分からない。

しかし何かはされたい。

こうして、俺が少女に組み伏せられているのが何よりの証拠だ。

俺は地面にうつ伏せになり、右腕を完全に反らされている。関節の限界。これ以上動かせば間違いなく脱臼するだろう。首は足で固定されており、抜け出すことも不可能だ。

「ええ加減にせえな、おにーさん。うちかて手荒なマネしとうないけど、売られた喧嘩は買うで？ ちいと頭冷やしいな」

……この神一族は、どうやら本当に関西弁を喋るらしい。キレると顕現する潜在的なスキルか……。

いざという時に、全く役に立たない能力だな……。

だが おかげで、少しだけ頭が冷える。

「落ち着いた？」

頭上から、少女の声。首にかけられた足から、ほんの少し力が抜ける。

「……ああ」

「そう。なら、その落ち着いた頭でもう一度考えてみて。人間が神を完全に封印することなんて、本当にできると思う？」

「………」

「確かに貴方は、五大精霊の加護を受けた天才なんでしょうね。でも、五大精霊が束になっても敵わなかったからこそ、精霊達は神達あたしに救いを求めたのよ」

「………」

「天賦の才を持つ者が、才も命も魂も全て擲って、ようやく完成したのが神剣、そうであつての『バンドドラァツ安寧禁忌』でしょう。封印する、ましてや殺すだなんて、同じ神でないとできっこないわ。たとえ貴方がどんなに天に恵まれていようと」

「……じゃない」

「え……？」

自分でも、寒気がするくらいに冷たい声が出た。

呟きは、風に乗って消えていく。俺の、自分に言い聞かす独り言のような呟きは。

「俺じゃ……ないんだ、あれを封じ込めたのは。俺は助けられたにすぎない。俺では、俺ごときではどうしようもなかったんだ。……あれを封じ込めたのは」

一際、大きな風が吹く。ざあんと木々が大きく揺れた。

思い出す。俺のたった一人の肉親である妹、ソニア・ウィンチェスターのことを。

「俺の妹、『虚無の器』だ」

*

木精。

火精。

土精。

金精。

水精。

世界を構築する精霊達は、大別すれば全てこの五大元素から成り立っている。それは魔術を使う者も使わない者も当然のように知っていることであり、魔術を極めた者も極められなかった者も、まずこの五つのいずれかに該当する才を潜在的に秘めている。

では、極論すれば、世界にはこの五つの種類しかないのか？あるのだ。

それが？虚無？。《何もないという属性がある》のである。

五行のうち四つを極めれば歴史に名を残す。

五つ全てを極めるのは 反則的な例外だ。

キネスシス・ロイヤルアート、そして俺は、この反則的な例外。確認されているのは、史上でこの二人のみ。

ソニアは、言うなれば、例外的な反則だった。

どの精霊にも認められない、という天賦の才。
どの精霊も認めることができない、という才。

人類史上、たった一人の？虚無？属性。何色にも染まらず、変わらず、唯一不変の永遠の特異体質。故に、『神を封じ込める器』としてこれ以上のものはおよそ存在しなかった。彼女の命を賭した生涯一度限りの魔術で、あの神剣は封印されたのだ。

ソニアの力のおかげで、俺はパンドラアーツから解放された。

「

少女は絶句している。俺を極めていた手足からもすっかり力が抜け、かといって俺も、わざわざはね起きたりはしなかった。

その必要性を感じなかったし……何より、気力がなかった。

「『虚無の器』にあの剣は封印され……二度と目覚めることはないはずだ」

何度目かになる、言い聞かすような俺の声に、それでも少女は呆然としており、しかし。

「……そう、そっか、そういうこと……」

と。一人で納得した様子で、しきりに頷いていた。

「成程……、？虚無？は流石に盲点だったわ。一時期気配が消えていたのは、貴方の妹さんの力っていうわけね」

でも。と。

少女は続ける。

「それでも、よ。？虚無？がどれほど例外であろうと反則であろうと、結局は人間の域を出ないでしょう。キネスシスは五行を極めていたからこそ、精霊の加護を得られていたからこそ、神の領域に踏み込めたけれど、精霊から見放され、見限られ、決して認められることのない属性、それが？虚無？でしょう。どこまでいっても純粹無色のそれは確かに、器としては最適かもしれない。けど、そんなものも所詮は一時的な措置に過ぎないのよ」

ひとたび封印されたとしても。

雛鳥が、卵の殻を突き破って誕生するように。

「いずれ、そんな封印は破られる。違う？」

「
今度は、俺が絶句する番だった。」

どんなに冷静に考えて分析したところで、否、冷静に考えて分析すればするほど、その理屈は的を射ていた。

《ならば》。

「器は……ソニアは、どうなった……？」

声が、震えていた。みっともなく、どうしようもなく震えていた。

少女は、首を　今度は横に、振る。

「分からない。貴方の妹さんが器になって封印しているというのは今始めて知ったことだし。でも間違いなく言えることは、パンドラアーツの封印は《解かれつつある》、ということよ」

顔面から血の気が引いていく。頭が冷たい。そのくせ心臓が激しく脈打っている。痛いほどの鼓動。どくんどくとやかましい。膝が折れなかったのは奇跡的だった。

「ねえおにーさん。考えようによっては、これは貴方にとってもチヤンスじゃない？」

「……え」

少女は。

あくまでも不敵に。

どこまでも無敵に。

全身で唯一赤い唇を、歪めて言う。

「封印されていた、っていうことは、そのまま妹さんの魂が束縛されていることに直結するのよ、あのパンドラアーツにね。……あたしの神喰なら、その呪縛を解き放ってあげることができる　《パ

ンドラアーツを殺して》、ね」

「……………あ」

凍結していた思考が。

やっと解凍を始めた。

「でも困ったわねえ。あたしが人間界で活動するには、人間の助力が必要不可欠なのよねえ。はてさてどこかに都合良く、《誰か手伝ってくれる天才的な人》はいないかしら？」

嫌みのように強調して。

その少女は、笑みを深めた。

ソニアを　少なくとも、その魂を　救ってやれる。

それならば。

(……やってやろうじゃないか　)

解凍を始めたシナプスが。

パズルの如くリンクして。

悪魔的な速度で完成した。

「レイリア・グローテックだ。一度だけ、お前に利用されてやる。

巧く使え」

その言葉を、あたかも先読みしていたかのように。

「サヤ。そう呼んでくれればいいわ」

純白の少女　サヤは、真っ直ぐに笑うのだった。

第三部 安寧禁忌（後書き）

傍点が多い！それはさておき、よつやくヒロインの名前を出すことができた……。レイリアとサヤのコンビがこれからどんどん活躍するのか、はてさて。それでは、今後にご期待お願いします。

第四部 墮天才（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第四部 墮天才

*

レイリア・ウィンチェスターは、二年前に死んだ。

生物としてはともかく……、剣士としては、確実に死んだ。

パンドラアーツのせい、などとは言うまい。

あれはあくまで、俺のせいだ。

俺が、俺を殺したのだ。

グローテック。

栄光 gloryと技術 technique。

それら全てを、己が名前に与えることで、俺は剣士としての俺を抹殺したのである。

剣を振れなくなってしまったから。

剣を振ることに、恐怖心を抱いてしまったから。

それでも、これまでの半生のほとんどを剣に費やしてきた俺は、完全に剣から遠ざかることはできなかった。

ソニアは、事あるごとに言っていた。

「わたしはね、剣のことが好きなお兄ちゃんが好きなんだよ」

どうしても、未練を捨てきれない。

最愛の妹の言葉が、呪縛のように頭から離れずにこびりついている。

だから。

俺はいつか、きっと再び剣を振るようになるうと決めた。

だから。

再び振るえるような剣に巡り合うために、『代行篡奪者』という汚れ役を始めた。

仕事の過程で、もしもそんな剣が見つければ、俺は全てのクライアントを敵に回すつもりでいる。

栄光も。

技術も。

信頼も、全て捨てて。

剣士としての俺を、レイリア・ウィンチェスターを蘇らせるために。

それが。

最愛の妹を殺してしまった俺にできる、彼女へのせめてもの手向けだと信じて。

これが、『代行篡奪者』の、『裏向きの』事情。

*

カトレア山を下りた頃には、すっかり陽が落ちていた。思っていたよりも時間がかかっていたらしい。山の中での野宿は危険だからな……せめてそれだけは避けることができて良かった。

「それで？ 結局パンドラアーツはどこにあるの？」

サヤが尋ねてきた。二人旅というのは久しぶり、というか二度目だ。あの時隣にいたのはまだ幼いソニアだったし、俺もまだ子供だったということもあって、足取りは遅かったが、一応は神であるサヤは微塵も疲れた様子がなく、むしろ俺よりもよっぽど元気だった。「西に進む。バルブという鉱山があるんだ。夜通し歩けば、明け方には着くだろう。そこにあれは封印されている」

「そ。じゃあ、さっさと行きましょ」

寝ずの旅だというのに、サヤは全く気にした様子もなく頷いた。

おそらく、早いところパンドラアーツに辿り着きたいのだろう。使命だからか面倒だからかは、まだ付き合いが短い俺には分からないが。

まあ、急ぎたいのは俺も同感だった。一刻も早く、一秒も早く、ソニアの魂を救いたい。はやる気持ちを表に出さないよう抑えるのに必死だった。

旅乗りは大方順調だった。途中で何度か細かい休憩を挟み、非常食として常備していた干し肉を食べた。流石に二人分はなかったの

で、半分に分けて食べ合った。サヤは遠慮したが、半ば押しつけるような形で渡してやった。

「旅なんてはじめて」

干し肉をかじりつつ、面白そうにサヤが笑う。笑うと、やはりソニアに似ている。生きていればちょうどこれくらいの年齢になっているだろう。そう想うと、ちくりと胸が痛んだ。

サヤは随分と饒舌だった。訊いてもいないことを話し始めたかと思うと、自分一人だけ思い出し笑いをしたりもしていた。神とは、とても思えない。退屈しない女だった。底抜けに明るくて、自分本位で、でもどこか憎めなくて。おかげで、俺も久しぶりに 本当に久しぶりに、笑った。

「ねえ、レイリア」

仮眠をとるべく、街道沿いの、それなりに見通しが良い場所を選んで火を焚いていた時だった。因みに、彼女は俺のことを臆面もなしに呼び捨てである。もつとも、存在としての上位に立っているのがサヤの方なのだから、当たり前といえば当たり前なのだが。

「貴方、どうしてこんな仕事をやっているの？」

「……えらく唐突な質問だな」

いや、もしかしたら機を窺っていたのかもしれない。確かに自分本位ではあるが、サヤは決して唯我独尊な性格ではない。最初に出会った時のように、人の内面に土足で上がり込むようなことは、決してしない。神だからといって偉ぶるわけでもなく、あくまでもパートナーとして、等身大で接してくれていた。

「……一言で片付けちまえば、未練、ってことになるんだろうな」

「未練？」

「俺は、剣が好きなんだよ」

「現在形なんだ？」

「……………」

茶化すように。

サヤはそう言った。

「……そうだな。結局は、そういうことになるんだろうな」
理屈とかではなく。
単純に、俺は剣が好きなのだ。

でも。

「恋人とかいるの？」

「……お前は修学旅行の女子高生か」

「だって、こういう夜にはこういう話がお約束だって聞いたわよ？
なんていうんだっけ……コイバナ？ 私が人間界に降りてくるの
は、これがはじめてだから、実はちょっと楽しみにしてたのよね」
「俺としては、人間界よりも神界の方を憂うべきだと思っただけど
な……」

「そんなことより、どうなの？ 恋人いるの？ いないの？」

「銃が恋人だよ」

「つまらない男ねえ……」

いつの間にか、十年來の知り合いのように会話が弾んでいた。独
りじゃないということがこれほど温かかったものだったなんて、忘
れていた。孤独には慣れたつもりだったのに。どうしてか、胸が温
かい。でも同時に、どこか切ない。

「先に眠れよ」

「レディーファースト、ってやつ？」

「人間界の常識、ってやつだ」

「意外と紳士なのね」

「そんな日もあるんだろう」

そんな風に軽口を叩き合いつつ、サヤは横になった。彼女の純白
の着物も、どうやらそれ自体が霊装らしく、汚れたり破けたりはし
ないらしい。

「夜這いなんて、しちゃダメだからね」

「莫迦か。思い上がんな」

「あは、怒った？ 冗談冗談」

その言葉を最後に、やがて、サヤは規則正しい寝息を立て始めた。

「……………」
焚いた火の向こうで横になっているサヤ。やはり、その顔はソニアによく似ている。病弱で、よく熱を出していたソニア。俺が一晩中看病していて、気が付けば一緒になって眠っていたこともあった。瞼を閉じれば、昨日のことのように思い出す。思い出せば、泡のように弾けて消える。

ソニア。

「俺が、絶対に助けてやる」
俺は、改めて強く自分に言い聞かせた。

小一時間で、サヤが目を覚ました。それと同時に、俺は出立の準備を整える。訝しんだ様子のサヤだったが、多くを追及してくることはなかった。

そうして、太陽が山間から顔を出す頃。

俺は、実に二年ぶりに、第二の故郷を訪れるのだった。
パンドラアーツが眠りし、バルブを。

*

優れた剣を造るためにはまず、優れた素材を見つけなければならぬ。

世界的に見ても大きな分類に入る鉱山であるバルブは、特に鉱脈に富み、希少な鉱物も多く手に入ることから、採掘の拠点として村が設けられ、栄えていた。二年前までは。

バルブ村の少し手前で、村人の男と鉢合わせした。村で唯一、食料品を売っている店の店長だった。俺とは顔見知りで、よく果物をおまけしてくれたことのある、気のいい男性だった。

「レ、レ」
彼は、俺の顔を見るや、まるで幽霊でも見たかのように顔を青くし、手にしていた大きな籠を投げ捨てて。

「レ、レイリアだあああ!!!」
一目散に。村の方へと駆け出して……否、逃げ出していった。

「……どういうこと？」

隣で、サヤ。事情の説明を要求しているのだろうが、俺はしかし。
「すぐに分かる」

とだけ言っつて、歩みを進めた。これ以上言っつても無駄だろうと判断したのか、サヤも黙っつて後ろをついてくる。

すっつかり荒れ果てた、バルブ村のとある朝は。

レイリアが帰つてきた、という最悪の凶報で目を覚ます。

「どの面下げて帰つてきやがった！ この？墮天才？が！！」

「お前の、お前ら兄妹のせいで、この村がどうなつたと思つてる！！」

「この悪魔！ 拾つてやつた恩を仇で返しやがって！！」

飛び交う敵意と罵詈雑言。バルブの村人達は、村の広場にこぞつて集まり、俺を激しく非難する。

……分かつちやいたが、結構、いや、かなり堪えるもんだな……。隣では、サヤが不愉快そうに目を細めていた。そんな彼女を見て小声で囁き合う人もいた。

「あの子……まさか、ソニアじゃ……！？」

「そんなわけ……。あの子は死んだはず……！？」

「いや、アイツは鬼子だ、化けて出たのかも……」

一向に鎮まる気配を見せないどころか、どんどんエスカレートしていく村人達。中には発掘用のシャベルや鈍器を持ち出す者もいた。そんな中。

「 静粛に！」

しわがれた、野太く力強い大喝にも似た一声が響き渡る。たちまち、しん、と水を打つたように鎮まり返る一同。そして、その声を発した者が、神話の再現のように人々の波を割つて現れる。

「久しいの、レイリア」

「村長^{オヤジ}……」

白髪に白ひげ、顔中にしわが無数に走つた老年の男性。片手に杖

を持ち、威風堂々と現れたのは、ここ、バルブ村の村長である。絶
対的な権力を持ち、彼の言うことには逆らってはいけないというの
が、この村の暗黙の了解である。

そして、俺とソニアを引き取ってくれた人、でもある。

「よくぞ帰ってきた、と言いたいたいところじゃがな、お前に限っては
流石にそうもいかぬか。言うとすれば、よくも帰ってきた、か？」

「のう、？墮天才？？」

「……………」

育ての親の視線が。

育ての親の言葉が。

氷のように冷たい。

当然だ。

俺は、それだけの罪を、犯したのだから。

「この村は来る者を拒まぬ。しかし、来たからにはそれなりのしき
たりに従ってもらふ必要がある。…………お主は、そのしきたりを、ま
してや鉄の掟を破ったのじゃぞ？ 忘れたとは言わさん」

「…………ああ、覚えてるよ」

「ならば何故、ここに戻ってきた？ 二度とこの地を訪れることを
禁じられた、『家族殺し』の罪人風情が」

侮蔑がめいっぱい籠もったその言葉を、俺は真っ向から受け止め
て。

「…………パンドラアーツの封印が、解けかかっているらしい」

「な っ！？」

にわかに騒然とする村民達。滅多なことではおくびにも出さない
村長ですら、眉をしかめている。

「ふざけるなっ！ あの剣のせいで、この村がどうなったと思っ
ていやがる！！」

「あの災厄を、また蘇らせるっていうのか！！」

「お前は！ お前はどれだけおれ達に恨みがあるっていうんだ！！」
敵意というより、それは最早殺意だった。今にも飛び掛かってき

かねない負の感情が、広場を埋め尽くす。

「……それは、まことかの？」

「信じてくれなくてもいい。俺は、パンドラアーツを殺しに帰ってきたんだ」

更に、どよめきが大きくなる。

「笑止。一度アレに吞まれておきながら、殺すだなどと。どこまでも思いつかりよるの、小童」

そうだそうだと、と口を揃えて合唱する村民達。

「立ち入ること認めぬ。即刻立ち去れ、レイリア・ウィンチエスタ

」 いや、今はグローテックなどと名乗っておるのか？ 剣の魔力に取り憑かれた、どこまでも浅はかな男よ

村長の。

そこから先は、言葉にならなかった。

しゃらんと。

音を立てて。

首筋に。

巨大刀の鋒が、向けられたからだ。

「それ以上レイリアの悪口言ったら、斬るよ」

サヤが。

神喰を、一瞬にして振るっていた。

一同に会した村人全員の殺気を。

遙かに凌駕し黙らせるほどの、怒気を放って。

あの剣で物質を斬ることはできないはずだが……牽制には十分だろう。あれほどの長さの刀だ、迫力は脆さを補って余りある。

何より……神喰を振るったサヤ本人の威圧感が群を抜いていた。

怒っている。

サヤが……完全にキレている。

関西弁も発揮スキルされないくらいに。

怒りのゲージを、完全に振り切って、ぶちぎれていた。

俺のために。

「……サヤ、いいんだ」

宥めるように、そっとサヤの肩に手を伸ばす。

「俺は、大丈夫だから……」

「レイリア……」

俺の顔を見て、意気消沈したのか。神喰の鋒を、そっと下ろすサヤ。

「二時間後。俺達はパンドラーツを殺しに行く。……今言えるのはそれだけだ。サヤ、行こう」

誰もが遣る瀬無さげに視線を彷徨わせている中。

俺とサヤは、無言で立ち去ることしかできなかった。

村の中心に位置する広場からはかなり離れた、村の端に存在する小さな木造の家。掘っ建て小屋程度の大きさしかなくそこは、かつて俺とソニアが暮らしていた家だった。

全てがあの日そのまま のわけがなかった。

村人に荒らされたのだろう、家具はほとんどが割られ、床に散乱している。

白かったはずのベッドシートはすっかり埃をかぶり、茶ばんでいる。

なにより……木目状の床に、大きな赤黒い染みができていた。

俺がここを最後に出た時は……まだ、乾ききっていなかった、それはソニアの血だった。

「……」

サヤは、何も言わない。

何も言わないということが……全てを物語っていた。

「……こんなところですか。二時間だけ、ここで休もう。そうしたら、封印した場所に案内する」

「……分かった」

そう言って、サヤは。

「その間、あたしは何をすればいいのかしら？」

全てを悟りきった上で。

意地悪くも、優しく。

口にする。

「気付いている？ さっきの貴方、とても寂しそうな、悲しそうな、辛そうな顔していたわよ？ まるで 全てを諦めきってしまったかのような」

「……………」

「……………貴方のこと、？ 墮天才？、って」

「……………そうだな」

瑪瑙色の双眸が。

全てを受け入れると。

そう、言っていた。

「昔話でも、聴いてもらえるか」

「面白い話？」

「つまらない話だ」

俺はそう言って。

「つまらない 男の話だ」

俺が殺した俺 レイリア・ウィンチェスターの過去を話し始めた。

第四部 墮天才（後書き）

はい、レイリアにーさんとサヤさんのゆるーい掛け合い及び、元天才の過去話です。因みに、サヤのスキル（関西弁）が今後発揮される予定はない！ というわけで、ようやく中盤、次回はレイリアの過去について語ります。お楽しみに。

第五部 兄妹二人（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第五部 兄妹二人

物心ついた頃には、俺とソニアは二人だけだった。帰るような家もなく。

いつの間にか……家を失くしていた。いわゆる、捨て子だった。

五行属性全てを極める可能性を秘めた、天が認めた才能の持ち主である兄と。

五行属性全てを極める可能性が皆無の、天も認めることのできない才能の持ち主である妹。

ありていに言って、そんな子供の才能を、親は……恐れたのだろう。

反則的な例外と、例外的な反則。

まだ十にも満たない年齢の俺とソニアは、行く当てもない、ただ生きていくためだけの旅を続けていた。

行く先々で、鬼子、と指差されて恐れられていた。

生きていくため、俺は剣を取った。こんな時代だ、探せば剣などどこにでも転がっている。それが不幸中の幸いだった。この時は、まだ。

俺がはじめて剣を握ったのは、忘れもしない七歳の時だった。魔剣でも精剣でも、ましてや神剣でもない、無銘の、何の特殊能力もない一振りの剣。

それを握った瞬間、俺の中で眠っていた何かが開花した。まるで、それこそ天啓のように。

どこをどう握って、どういう軌跡を描いて振るえば、どこがどう斬れるか、頭の中で方式が出来上がっていた。

剣士レイリア・ウインチェスターの誕生だった。

とはいえ、天才的といっても、剣を持ったその日から天才だった

というわけではない。ただ死ぬわけにはいかなかった。隣にはソニアがいたのだから。常に背水の陣に立ち、剣の力量を磨いていった。天才などと呼ばれ始めたのは、もう何年後かになってからだった。

ソニアは、剣を振るうことに関してはからつきしだっただけでもっとも、そんなことをするだけの体力自体を持って産まれなかつたけれど、剣を振るう俺以上に、剣のことを熟知していた。剣を振らないが故に、剣を振らなかつたが故に、誰よりも剣について深く識^しっていた。

二人で、研鑽を積んでいった。俺が剣を振るい、ソニアがそれを指導する。二人で一人の剣士として、完成度を高めていった。ソニアは俺にとって、最愛の妹であると同時に、誰よりも厳格な師でもあった。

ソニアは、事あるごとに口にしていた。

「わたしはね、剣のことが好きなお兄ちゃんが好きなんだよ」

そう、俺はただ単純に剣が好きだっただけのことなのだ。人を斬るのが好きだったわけでは、断じてない。ただ生きるため、剣を振るっていただけだった。

剣術の成長と同様に、魔術の才能も芽吹いていった。火属性から始まり、そこから一年も経たないうちに、五行属性全ての基礎的な魔力運用は出来上がっていた。

長きにわたったソニアとの二人旅も、ようやく安住の地を見つかることで終着した。バルブという、鉱山の中にある小さな村だった。そこは、ほとんどの人が何かしらの事情を持って辿り着く、言ってしまうえばほとんどの人が堅気ではなかった。村長が育ての親として俺達の面倒を見てくれた。代わりに、俺は鉱物を盗掘する盗人を撃退する用心棒として、あるいは、賞金剣稼ぎとして外の世界に一回つて金を稼ぐことで、すぐに村人達とも打ち明けていった。

そうしているうちに、気が付けば、レイリア・ウインチェスターという剣士は比類なき天才として、世界に認知されるようになっていた。それに比例するように、我こそ最強、と自負する強豪と果た

し合うことも増えていった。結果として。それら全てを呆気なく打ち破ったことで、俺の名は更に有名となつていった。

五行属性を全て極め、剣士として大成していった俺は、『最低の鈍剣を最高の鋭剣に変える』という謳い文句を掲げ、自他共に認める天才剣士として、いつしか名を馳せていた。

『最強』『天才』『神童』『剣聖』などの無数の栄冠を欲しいままにした、怪物的剣士レイリア・ウインチェスター。事実上、おそらくは俺以上に強い剣士はいなかっただろう。魔剣も精剣も必要ない。ただ必要最低限に斬れるだけの剣さえあれば、俺はそれだけで十分だった。少なくとも、それくらいの自信はあつた。弘法が筆を選ばなかつたように、レイリア・ウインチェスターは剣を選ばなかつた。選ぶ必要性すら感じなかつた。

二年前のある日。ギルドでパンドラアーツという神剣の名前が持ち上がった。かの伝説的刀工キネスミス・ロイヤルアーツが造りし、神剣。この世のありとあらゆる絶望を内包した、究極の混沌。

キネスミスの名は、勿論知つていた。パンドラアーツという神剣も当然、知つていた。そして、キネスミスが五行属性全てを極めた、俺と同じ反則的な例外であるということも。

その時、俺ははじめて運命的なものを感じた。俺なら、キネスミスと同じ力を持つ俺なら、あるいはパンドラアーツを、かの邪悪を封じ込めることができるのではないか。この維新時代に、この才能を持つて産まれた、俺に課せられた宿命なのではないかと思つた。

俺ならできる。そう思つていた。それだけの自信があつた。

そうして、俺はパンドラアーツに行き着いた。そして、その剣の柄に手をかけた瞬間。

俺の意識は。一瞬にして呑み込まれた。

視界が暗転した。ただ一つの感情。パンドラアーツから伝わってくるたつた一つの感情に、全てを支配された。

純粋な負の感情 『憎い』という絶対的な感情だった。

ニクイ、ニクイ、ニクイ、ニクイ。

憎悪と、憎悪と、憎悪と、憎悪。

頭の中を蹂躪する、怨嗟の声。全ての物を破壊しろ、全ての者を皆殺しにしろと、圧倒的な魔性の力が俺を支配していた。

事ここに至って、俺という人格は完全に失われていた。紛うことなき天才のその剣と魔術の技量。その全てが仇になった。邪神に魅入られ、悪鬼と成り果てた俺を止めることは、最早誰にもできなかった。

そうして。俺は最大の罰を犯した。最愛の妹である、ソニアを手にかけてのだ。ソニアが愛用していた果物ナイフ。それが、ソニアの腹を貫いていた。ソニアの、白い肌が瞬く間に血の赤に染まっっていく。パンドラアーツに呑み込まれた俺は、まるで鮮明なスクリーンに映し出された映像のように、遠くからそれを成す術もなく見ていた。

やめてくれ！ 俺は何度も心の中で叫んだ。それでも、かの神剣の前に、そんなものはあまりにも無力な抵抗だった。目の前でソニアの命が失われつつあるのだ。実の兄である、俺の手によって。その時、致命傷を負ったソニアの唇が、弱々しく動いた。弱々しくも、はつきりと。強い意志を感じさせる声で。

大丈夫だから。

その言葉を聴いて、俺は徐々に自意識を取り戻していった。？虚無？属性を持つソニアは、己が命と身体を犠牲にして、パンドラアーツを封じ込めようとしたのだ。

お兄ちゃんは、大丈夫だから。

俺はパンドラアーツを右手に、血に濡れた果物ナイフを左手に持ったまま、妹の末期の言葉を聴いた。

わたしは、大丈夫だから。

だからお兄ちゃんは、また剣を持ってね。

ソニアは、笑っていた。顔で笑って、心で泣いていた。笑って泣

いたまま、静かに息を引き取った。
後に残されたのは、呆然と立ち竦む俺と、パンドラアーツ、そして、最愛の妹の死という、残酷な真実だけだった。

*

「……滑稽だろう。天才だ神童だと、散々持てはやされて天狗になった拳句、その慢心が招いた悲劇だ」
慢心ではないという自信はあった。

けれど結局は、単なる思い上がり過ぎなかった。

慢心ではないという自信こそが……この上ない慢心だった。

どんなに天に愛されていようが、人間は所詮人間。

神に敵うことなど、できようはずもなかったのだ。

「ソニアは、『虚無の器』は、その魂を依代にパンドラアーツを封印した。そのおかげで、俺は今もこうして生きていられる」
けれどそれ以来。

俺は、剣を振るうことができなくなってしまった。

大好きだった剣を振るうことに恐怖を抱いてしまった。

「それでも、ソニアの言葉が、どうしても頭から離れない」

わたしはね、剣のことが好きなお兄ちゃんが好きなんだよ。

「確かに、俺は剣が好きだった」

でも。

「それ以上に……!!」

拳を握り締める。奥歯を噛み締める。理性を保つのに必死だった。
血を吐く思いで言葉を紡いだ。

「俺は……妹のことが好きだったんだ……!!」

心が、悲鳴を上げていた。脆い心が、砂の城のように崩れ落ちそうだった。それでも、涙は許されない。ソニアは、一度たりとも涙を見せなかったのだ。なのに、兄が泣いてどうする。泣いたところで、ソニアはもう、いないのだから。

二度と、還ってこないのだから。

「それ以来、俺は剣を振れなくなった。でも未練を捨てきれなくて……ソニアの最期の言葉が、頭にこびりついて、まるで呪縛のようにまとわりついて、どうしても忘れられない……」

だから、俺は探している。俺が再び、振るえる剣を。

「惨めだろう。不様だろう。剣が握れなくなったから銃を握るようになった。子供のような屁理屈でしかないのは分かってる。それでも」

再び剣を振るえるようになるのが。

剣士としての俺を蘇らせることが、ソニアへの唯一の贖罪だと信じて。

「俺は……っ」

その時。

唇が、何かに塞がれた。

サヤの純白の髪の毛が。

視界いっぱい、映っている。

サヤの温もりが。

サヤの優しさが。

繋がりが合った唇から、伝わってくる。

「ん……」

身じろぎを一つして、サヤが俺から離れる。

「……サヤ？」

「男の人が泣いている時は、こうして慰めてやれ、って教えられたから」

「……相変わらず、どこかズレた教育方針だが。」

「でも、変だな」

サヤの、白磁のようなその顔色が。

あからさまに激しく紅潮している。

「あだし、すぐドキドキしてる」

「……そりゃ、いきなりキスなんてしたら、緊張くらいするだろう。俺だって、さっきとは違う意味で興奮している。」

「レイリアはさ、考えすぎだよ」

と。サヤは静かに、そう言うのだった。

「貴方は確かに、取り返しのつかないことをしてしまったのかも知れない。結果として、妹の命を奪ってしまったのかもしれない。それは確かに、貴方の心に深い傷を負わせたのかもしれない」

だとしても、と、サヤは続ける。

「貴方は、《生きていないじゃない》。やり直すことなら、いくらでもできるじゃない。剣が好きなんでしょう？ だったら、それだけで構わないじゃない。罪とか罰とか、そんなこと考える必要ないよ。剣を振るうのが怖いなら、ゆっくりでいい、ゆっくりでいいから、それを克服していいこう？」

「……あ」

その言葉は。

ソニアにそっくりなサヤからの、その言葉は。

まるで……本当に、ソニアが言っているように感じた。

「ほら！ しっかりしなさい！ 妹の魂を救うんでしょう！？ そんな腑抜けた男を、あたしは相棒に選んだ覚えはないわよ！」

「……ああ、そうだな」

「声に覇気がない！ もう一回！」

「ああ！」

サヤの言う通りだ。

迷う必要などない。

今はただ、ソニアの魂を救うことだけを考えていればいい。

俺の返事に、サヤは満足げに頷いて。

「ところで、さ」

話を唐突に切り替える。

「さっきのアレ……あたしのはじめて、なんだよね」

「……奇遇だな、俺もだ」

「ついで、と言っちゃなんだけど……もう一回くらい、しとこうか？」

「……そうだな」

そう言って、俺とサヤは再び近づく。

まあ。

「そんな日もあるだろう」

二つの影が、一つに重なった。

第五部 兄妹二人（後書き）

……はい、サヤの父親は本当にいったい何を教育しているんでしょうね。それはともかく、レイリアの過去大暴露編です。まあありがちですね分かります。なんかクライマックスに向かってオチが見えてきたような気がしないでも……。まあ、できれば最後まで宜しく願います。

第六部 神喰（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第六部 神喰

二時間後。

「……すごい瘴気」

俺達はバルブの、一つの洞窟の入り口にやってきていた。

この洞窟の最奥に……俺は、ソニアを埋葬したのだ。
パンドラアーツと共に。

「ここら一帯の鉱山は、ただでさえ盗掘者が多かったからな。……そこに神剣が封印されている、なんて尾ひれがついて回ったんじゃ、村が荒れるのも無理はない」

「パンドラアーツを狙ってやって来て、返り討ちに遭ったってわけね。この中は、文字通りパンドラアーツの毒気に冒されきった魔窟、つてことになるのかしら いえ、神窟、かしら？」

「そんなことはどうでもいい。サヤ、確認だ。お前のその神喰。パンドラアーツの《毒気を》殺すことも可能なんだな？」

一度触れたからこそ分かる。あの神剣『パンドラアーツ安寧禁忌』は。。
「《剣の形をした、残留思念の塊だ》。触れた者、近付いた者を否応なく呑み込む、キネスシスの怨念の集合体。屍だらうとなんだらうと、アレは問答無用で乗っ取るぞ」

「その辺りは心配ご無用よ。一口に『神』と言っても、その在り方は様々。だけど、神が持つのは、『不死』という概念ただ一つ。そこに例外はないわ」

しゃらん、と。鈴が鳴るような華麗な音を立てて。

神喰を一振りしたサヤは、あの笑みを作る。

あくまでも不敵で。

どこまでも無敵な。

「神喰は、その概念をこそ破壊する究極の概念武装よ。魂の残滓だらうとなんであろうと、神喰から逃れることはできない。逆説的に

言えば、少しでも神が憑依しているのなら、それは返還対象になる
っていうことよ」

「そうか。なら、行こうじゃないか、『神剣返還神』」

「そうね。ぼちぼち行くとするわよ、『代行篡奪者』」

互いの称号を確認し合って。

俺達は洞窟内部へと侵入していった。

洞窟内は、異様としか形容しようのない空気に満ちていた。まわりつくような湿気と、からまりつくような瘴気。そして、吐き気を催すほどの肉の腐臭。当然陽の光など期待できないので、一寸先どころか、自分の足許さえも闇状態である。俺は？火？属性の魔術で視力を補強して、真っ暗闇でも普通に活動できるようなコンディションを作り出す。

たいまつなどと、どうしても荷物になつて戦闘に差し支えるかな……。魔力はかかるが、背に腹は替えられない。

入って数メートルもしないうちに、最初の敵と遭遇した。パンドラアーツの毒気に身体を乗っ取られた、死して尚稼働を続ける屍兵^{ケール}。数は二体。二体とも、手には剣を持っている。うち一体は、片腕がなかったが……。

襲い掛かってくる死霊。お誂え向きなことに、二対二だ。俺は俺に向かつてきた方、隻腕の死霊が振るう剣筋を見極める。

ニクイ

「ッ！」

呪詛の声が響いた。誇張でもなんでもなく、地の底から響いてくる怨恨の声。かつて俺が吞まれた、絶対的な憎悪の念。その念に思わず過敏に反応してしまい、俺の咄嗟の行動が一瞬遅れた。

その一瞬で、十分だった。相手に先手を取らせるには。

大上段から振りかぶった剛剣。空を切り裂いて俺の頭上から迫る。辛くも、後ろに一歩退いて、その攻撃を回避することに成功した。

剣の射程距離外。

ならばそれは、銃の射程距離内だ。

俺はウィンチェスターの引き金を引いて、反撃に出る。洞窟内に反響する、乾いた銃声。実弾が発射され、死霊の頭蓋に風穴が開く。本来なら、それで決着するはずだった。だが、相手は死霊。既に死んでいるモノだ。頭部を失ったところで、活動を停止させたりはしない。

「ふっ！」

短い掛け声。サヤが、一瞬にして神喰を振り抜いていた。一切の如才のない動きで繰り出される胴。しかし、一刀両断されたのは胴ではなく、そこに取り憑いた怨念のみだった。糸の切れたマリオネツトのように、がくりと倒れ伏す隻腕の屍。

「ま、いくらパンドラアーツに乗っ取られていようと、所詮はこんな入り口でやられる雑魚よね。相手にならないわ。……それより、レイリア？」

サヤが対峙していたところの死霊はというと、とつくのとうに殺たおされている。俺がやり合っていた一合のうちに、勝負はついていたということか……。相変わらず、凄まじい剣技の冴えだった。

「レイリア、貴方、どういうつもり？」

「……………」

「こんな雑魚に後れをとるなんて。どうして本気を出さないの？」
厳しく、責め立てるような口調でサヤが問う。しかし、俺は何も言えない。その無言を回答と受け取ったのか、サヤはため息を漏らす。

「恐怖が消えないのね……。ゆっくり、克服していくんでしょう？」

「……………」

「妹さんの魂を、救うんでしょう？」

「……………」

「ああ、そうだな」

「……………」

いつの間にか、乱れていた呼吸を整える。
俺は、ソニアを救うのだ。
何度も、何度も自分に言い聞かす。

「大丈夫。貴方の背中あたしが護ってあげるから。だから、しっかりしなさい」

男の俺がそんなことを言われるのは、甚だ情けない限りだが、それでもサヤの瑪瑙色の瞳には慈愛が満ちていた。

そうだ、俺が打倒するべきなのは、キネスシスでもなければパンドラアーツでもない、俺自身。かつて負けた自分に勝つため、俺はここに居るのだ。

自分に勝って、ソニアを救うため。

深呼吸を一つ。大きく吸って、大きく吐いた。

「大丈夫だ。行こう」

そう言って、俺は歩みを進めた。

最奥部までは、確か三十分足らずで着いたはずだ。

しかし、既に一時間は経過しているというのに、半分程度しか踏破していない。

何体ものグールに阻まれて、なかなか先に進めないのだ。

これだけの数の怨霊が跋扈しているということは……それだけ、封印が解けつつあるということだろう。

「はあっ……」

奥に進むにつれ、瘴気が濃くなっていく。

対して俺は、未だに決定的な恐怖心が拭えないでいた。

何度も戦闘を繰り返し返してはいるが……あの声が聞こえてくる度に、精神が委縮してしまうのだ。さつきから、ほとんどの戦闘をサヤ一人でこなしている。

自分が情けない。俺はソニアを救うのだ。何度も心で繰り返し返す。そうして己を叱咤激励していなければ、心が折れてしまいそうだった。

俺は……こんなにも弱かったのか。

「……………」

さつきから、サヤは何も言わない。

何も言わないということが、何にも勝る叱責に思えてしょうがなかった。

手を貸すどころか、足を引っ張っている。

こんなにもみっともないことがあるものか。

ぐつと拳を握り締める。こんなところで立ち止まるわけにはいかない。碎けそうになる心に鞭打って、俺は更に足を進める。

それを。

「ねえレイリア」

さっきからずっと無言を貫いていたサヤが、止めた。

「……なんだよ」

ふてくされたように言い返す自分が、情けない。ただ、どうせ、また自分を責めるようなことを言うのだろう。そう思うと、どうしてもそんな声しか出せなかった。

しかし。

「この仕事が終わっても、あたしのパートナーを続けるつもり、ない？」

返ってきたのは、そんな、意外すぎる一言だった。

「え……？」

「言ったでしょう。あたしは『神剣返還神』よ。今回が、パンドラアーツが終わりじゃないの。むしろこれからが始まりだと言ってもいい。それで、どうしても人間界で活動するには協力者が必要だから……さ。これからも、貴方と一緒に旅ができればな、とと思って」

それは。

その言葉は。

暗に、この仕事を無事に終わらせることができることを、確信しているかのようだった。

俺が、過去を克服することを……信じきっているかのようだった。こんなにも足手まといになっている俺を、信じきっているように。少し考えておいてくれると、嬉しいわ」

真っ直ぐにそう微笑んで、サヤは言うのだった。

「……そんな、こと」
「そんなこと、言われたら。 。
どうしようもねえじゃねえか。」

向けられた信頼には、応えるしか、ねえよな。

ニクイ

地の底から響いてくる、怨嗟の声。絶え間なく耳にまとわりつく、
呪詛こえの念。

「《うるさい》」

俺は、地面に向けて引き金を引いた。土の地面が抉れ、穴が穿たれる。

たったそれだけの行為。

たったそれだけの行為で。

「憎みたいなら、いくらでも憎めばいい。俺はそれに 憎らしく
抗うだけだ」

俺の中で、何かが吹っ切れた。

開き直った、とも言つう。

それでいいのだ、今の俺には。

俺は、独りではないのだから。

「行こうぜ」

「行くわよ」

二人、並んで歩き出す。

足取りは、軽かった。

更に三十分が経過した。ますます濃くなる瘴気。怨霊は無限に増
殖し、俺達の行く手を阻む。

だが。

「火弾 ！」

ウインチェスターから噴射された、紅蓮の炎。それに包まれて、
グールは一瞬にして消し炭になった。

《念の数は無限でも》。

《屍の数は無限ではない》。

こうして燃え尽きてしまえば、どんな強大な念が渦巻いていたとしても、取り憑くことはできまい。

背後から殺気。俺のすぐ後ろで、剣が振り下ろされようとしている！

なめられたもんだ。

その程度で！

「俺を止められると……思うな！」

頭上から振り下ろされた凶刃を、俺は容易く回避する。

《前を向いたまま、真後ろからの攻撃を回避したのだ》。

そこまで露骨に殺気を放っているのなら。

そちらに目を向けるまでもなく、躲せる。

振り下ろされた剣は 銘のある精剣かもしれないが 火属性。

刀身そのものから熱を発するそれを。

「水弾^{すいだん}」

高压水流の魔弾で、粉碎した。

そしてとどめは 。

「花丸」

サヤが持つ、神喰の一閃。

七体いたグールの群れは、僅かに十秒で全滅させられていた。

吹っ切れた俺とサヤのコンビネーションは、絶妙だった。出会っ

てまだ一日しか経過していないとは、到底思えない。ましてや、俺は誰かと一緒に戦うことなど、これがはじめてである。阿吽の呼吸とは、まさにこのことだと、自分のことながら思った。

「いい感じね」

「莫迦。こんな有象無象を相手にいい気になるなよ。……いよいよ、本命のお出ませ」

辿り着いた、最奥部。全ての呪いと災いが眠りし、パンドラの匣^{はこ}。

ソニア。

待ってる。

今、助けてやる。

「あれが……!?!」

「ああ……。神剣『安寧禁忌』だ」

まるで。

見えざる十字架に磔たくされたかのように、宙空に浮かぶソニアの死肢体。そしてその胸の中央を貫いた、禍々しい色彩を放つ一振りの刀剣。

長さ三尺四寸、反りは八分、柄にも鐔にも一切余計な装飾のないそれこそが、始まりの刃。この世全ての災禍を詰め込んだ、キネシス・ロイヤルアートの残留思念の集合体。

それが、『脈を打っていた』。

どくん、どくん、と。

刀身そのものが胎動していた。

「『虚無の器』が……破られつつある」

サヤが呟く。それがなくても、俺にも分かっていただろう。ソニアの魂が、壊されつつあることは。

一步を踏み出す。それに呼応するかのように、俺達を排斥しようとするかのようにパンドラアーツが激しく脈を打つ。そして、そのたびに封印かづに少しずつつひびが入っていく。

「一度、封印を解くわよ」

俺はごくり、と生唾を呑む。いよいよ、あの剣が再び解き放たれるというのだ。どんなに覚悟を決めていたところで……迷いが完全に消え去るわけではない。

「大丈夫」

そんな俺の心情を汲み取ってか、サヤは優しく笑いかけてくる。さしもの彼女の顔にも、緊張の色が見えていた。

すう、と息を整えて。

大きく頷く。

それを確認して、サヤは両手で印を組み
封印解除の、呪文を唱える。

「 解！」

その瞬間、だった。陽の光一つ差し込まないはずの洞窟内に、更なる漆黒の帳が下りる。温度が一気に低下し、ある一点を中心に目を開けていることも叶わなくらいの爆風が吹き荒れる。地鳴りが轟き、さながらそれは世界の終わりを彷彿させた。

木も。

火も。

土も。

金も。

水も。

五行の全てを超越した、君臨者が復活する。

憎悪と、憎悪と、憎悪と、憎悪。

これこそが、伝説的刀鍛冶キネスミス・ロイヤルアートの、才と命と魂の結晶。妄執に憑かれ、憎悪に冒され、怨嗟に慟哭し、絶望を渴望した彼がついに到達した、空前絶後の最悪の災厄。

『バンドラアーツ
安寧禁忌』。

「っ……っ！」

あの神ですら、息を呑むほどの、圧倒的なプレッシャー。常人ならば、これだけで毒され、理性を失っていたであろう。一度経験したこのある俺でさえ、歯を食いしばって耐えなければ頭がおかしくなっていただろう。それほどまでの、狂気。

「まさか……これほどとは思ってなかったわ」

不敵に笑うサヤだが、額から一筋、汗が垂れ落ちている。余裕の欠片も、ありはしなかった。

そして、ソニアが。

宙空で磔刑に処されていた『虚無の器』が。

今ゆっくりと、地上に降り立つ。

そして。

《その右腕で、胸に突き刺さった剣を引き抜いた》。

ニクイ！！

「っ
！」

一瞬、吹き飛ばされるかと思った。
喝、と見開かれた双眸に。
憎、と放たれる純粹な負の感情に。

無限の力の前に、思わずひれ伏しそうになっていた。
でも……それは赦されることではなかった。

俺の妹が。

ソニアの魂が。

パンドラアーツに蹂躪されている。

それは決して、赦免していいことではなかった。

あんなにも優しくかったソニアの顔が。

今ではまるで、般若の相。死して尚生きる、亡者の顔だった。

「……憎い、つて？」

俺はウィンチェスターの撃鉄を下ろし。

「 奇遇だな、俺もお前が憎いよ、パンドラアーツ キネシス ！！！」

飛び出す ！

俺は右に。

サヤは左に。

全くの同時に まさしく、阿吽の呼吸で！

作戦は既に練ってある。

否、練るまでもない作戦であり、サヤとも打ち合わせを済ませる
までもなく承知の上だった。

これまでと同じ。

俺が足止めをしている間に、サヤの神喰の一斬でパンドラアーツ
を殺す。練るまでもなく、他に有効な策などありはしなかった。

これまでと違ったのは。

俺が飛び出したのと同時に。

サヤが飛び出したのと同時に。

ソニアも、同時に飛び出していたことだった。

俺に向かって、まるで動きを読まれていたかのように、一直線に。
「!!!」

思わずトリガーを引　こうとして。
躊躇してしまった。

変わり果ててしまったとはいえ、姿形はソニアそのもの。俺がこ
の手で殺した、実の妹の　。
それを再び傷付けることに　躊躇いを覚えてしまった。

コンマ五秒に満たない遅れが。

「　レイリア!!!」

サヤの声に反応する間もなく。

致命的な隙を、生んでしまった。

踏み切った勢いそのままに。

ソニアは　否、《パンドラーツは》、その剣を以て。

ニクイ!!!

無慈悲の。斬撃を繰り出した。

回避は間に合わない。防御も不可能。この軌道は致命傷級だ。迫
る凶刃。

まさに、たまゆら玉響。

俺は先刻引くことを躊躇した引き金を。

躊躇なく。

《自分に向けて》、引いた。

「　木弾!」

魔言と共に。

吐き出される、風の弾丸。手加減を少しでも誤れば、圧縮された
風圧が身体を貫通して死んでいただろう。

だが、うまくいった。自分でも見事としか言いようがない力
加減で、俺の身体は派手に吹っ飛び、土の壁に叩き付けられて止ま
った。

「が　!」

とはいえ、自爆技であることに違いはない。肺が一時機能を停止

し、呼吸の自由が奪われる。

それでも！

結果的に、俺に向かって剣を振り抜いた、ソニアの足は止まっている！

ならば十分。

その背後。神喰を振りかぶるサヤの姿が、はっきりと見えたからだ。

殺^とった！

そう、確信した。

が！

ぎん！と。

「な　っ!？」

鉄と鉄とがぶつかり合う、不協和音を立てて。

神喰とパンドラアーツが、《鏢競り合っていた》。

パンドラアーツを両断するはずの神喰が、あたかも普通の剣闘士のぶつかり合いのように、衝突していた。

「うそっ……、なんでっ!？」

剣尖を振り抜いたところのサヤも、啞然としている。『不死』という概念を例外なく破壊するはずの神喰が、どうして防がれたのか。俺には……分かった。《分かってしまった》。

神喰が押し負けた理由。

それは　器^{ソニア}のせいだ。

『虚無の器』を、五行全てを極めたキネスシスの思念体が操っている。

五行全てに認められた天賦の才と。

五行全てに見放された天賦の才。

《本来交わるはずのない二つの才能が、この上なく一つに融合している》。

例外というのなら、それに対応するだけの前例があるということだ。

しかしながら、この場に於いて、それは例外ですらない。あれはそんな環を越えた先にある、本当の意味での限外たまき！
弾き飛ばされる、サヤの神喰。体勢を崩されたところに、ソニアの蹴撃がクリーンヒットする。単純な力押しで行けば、キネスシスの方に軍配が上がるであろうことは想像に難くない。

「うあ　っ！」

苦悶の表情を浮かべて吹き飛ばされるサヤ。更に追撃をかけんと、ソニアの足が沈む。
それを。

「　ウインチェスター」

見逃すほど。

俺は、おちぶれちゃいない　！
木火土金水。

五行の全てを。

統合ひっくに！

「五行弾！！」

五つの色彩を放って撃ち出される、極限の魔弾。全てを生み全てに剋つ、命中した物を悉く《消滅》させる、レイリア・グローテックの最後にして最強の切り札！

それが、ソニアに命中する　。
ぱん。

乾いた音を立てて。

消滅したのは　五色の銃弾。

消滅させるはずの銃弾が、まるで風船のように乾いた音を立てて霧散したのだ。

（五行弾でさえも……っ！）

真の神を前にして……精霊の力をどんなに束ねたところで、それはあまりにも無力な抵抗でしかなかった。

視界が、絶望の色に染まっていく。

ウインチェスターの銃身が軋んでいる……五行弾を撃ち出すには

相当な負荷がかかる。撃ち出せるのは 俺の魔力残量的にも、も
って残り一発。

だが……一発だろうと百発だろうと、あれは容易く凌ぎ切るだろ
う。

俺はここでも……パンドラアーツに打ち勝つことができないのか
！

かつて負けた自分を、かつて殺した自分を、取り戻すことなど
できないのか！

俺はもう一度銃口をソニアに向けようとして 。

ニクイ！！

「っ！」

その眼光に、気圧された。

世界が違う。

次元が違う。

人が神に挑むなど……愚行以外の何物でもなかったのだ。
その事実、俺が屈服しそうになった瞬間。

「はあっ！」

今度こそ。サヤの神速の袈裟斬りが奔る。

ソニアは……身体を俺の方に向けている。

サヤは完全に、ソニアの背後をとった形だ。

一筋の希望が見えた瞬間だった。

しかし。希望は呆気なく絶望に塗り替えられる。

《あれは》。

ぐるんと。身体を螺旋回転させて。

重力ではなく、《遠心力で》対象を斬る、あの動きは 。

身体を捻ってサヤの斬撃を躲したソニアは。

回避に費やした遠心力を利用して 。

斬、と。

サヤの胴を深々と斬り裂いていた。

「あ」

ただ、彼女の名前のみを連呼する。
腹部から。
どくどくと。

夥しい量の出血を垂れ流す、相棒の名前のみを。

「サヤ」

「……うるさい。傷に響く」と。

彼女はまるで、危機感を感じさせないような表情で。
しっかりと。俺を見上げてきた。

どんな深手を負ったとしても。

決して揺るがない、強い意志を持って。

「い、今手当てを」

「莫迦言わないで。そんな暇があると思う？　少し冷静になりなさい」

はぁ、と呆れるようにため息を吐いて。

よく似合う、ため息を吐いて。

「参ったなあ。とんだ計算違いだわ。五行と？　虚無？　の組み合わせなんて、こんなのもう、反則中の反則でしかないでしょう」

諦めたかのように。

状況を分析する。

「ちよっと、この傷はどうしようもないわね……。指先に力が入らないわ。こんな状態じゃ、剣を振ることも満足にできない」

神喰を、無造作に垂らして。

サヤは、そう宣言する。

「残念だけど……」

「さ、サヤ……」

どうあがいたところで。

「勝ち目がないわ」

冷静に、現状を分析した上での、結論だった。

勝てない。

負ける。

死ぬ。

それが、パンドラ^神アーツに背いた愚か者が行き着く、
結論^{げんじつ}。

「《手加減した状態じゃ》、ね」

「え……」

自分の耳を、疑った。

今、サヤは、なんと言った？

「て、手加減……？」

「神喰の、真の力を解き放つわ」

そう言っ

て。神喰を、逆手に持ち直して。

「いい？ レイリア。この時のために、貴方に協力を仰いだのよ」

サヤは俺に、その柄を向けてきた。

「あたしの代わりに、神喰を取っ

てな！？ そ、それは……」

いきなりすぎる。

そんな、唐突にそんなことを……。

「サヤ、俺は剣を……」

「妹さんを、助けるんでしょう？」

「だ、だからって」

「《あの夜に誓った言葉は》、嘘だったの？」

「！？」

まさかお前、あの時眠っていなかったのか？

「はつきり言っ

てあげる。レイリア。これが最後のチャンスよ。これを逃せばきつと、貴方は二度と剣を振るえるようにはならない」

「そんな、ことは」

「そんなことは？」

「ない、とでも言うのか？」

自分の命と。

サヤの命と。

ソニアの魂がかかった、この場面で？

「ねえレイリア」

諭すように。俺の名前を呼ぶ。

「貴方には、忘れちゃいけない大切な目標があるでしょう」

どこまでも見つけてくる。

どこまでも見据えてくる。

どこまでも見上げてくる。

どこまでも見下げてくる。

「？生きる？っていう、大切な目標が」

真っ直ぐに。力強く。

サヤは、そう言うのだった。

「

そうだ。

俺は生きなければならぬ。

妹の分まで、とは言えない。

ただ、犯した罪の分までは。

生きなければならぬのだ。

今覚悟を決めないで　いつ決めるのか。

俺しかない。

俺にしかできないというのなら　！

今こそ。

今度こそ。

(……やってやろうじゃないか)

蘇らせてみせる。

俺が殺した俺を。

吹き荒ぶ、絶望色の風の中。

この風を踏み越えて、俺は俺自身を打倒する！！
差し出された巨太刀を。

漆黒の神剣『神喰』を。

俺はしっかと受け取って。

サヤは、満足げに笑った。

腕は。

震えない。否！

(震わせない！)

両手で固く、握り締め。

まるでそこに 俺の手の中にあるのが当たり前であるかのよう
に。

神喰は、俺の手に握られたのだった。

今まさに。

剣士としての俺が、二度目の産声を上げた。

「流石、あたしの相棒」

そう言ったサヤの全身から。

眩いばかりの。光が溢れる。

網膜を焼き尽くす、純白の閃光。

思わず目を閉じて、閃光を浴びる。

それは一瞬だった。永遠にも似た、一瞬。

眩い光が去った後に残されたのは。

美しい。

純白の。

五尺ばかりの。

鞘、だった。

(そういう ことか)

それを見て。

直観が全身を奔った。

刀身が恐ろしく長いのは。

自分の背丈に、合わせて造られたから。

人間界で協力を仰いだのは。

自分では、剣を振るうことができないから。

剣ではなく。

《鞘こそが》、神剣『神喰』の本体！

全て、一瞬のうちに理解した。そして、次の瞬間。

一喝にも似た、鞘サヤの音が飛ぶ。

『《納めて》！！』

そこから先の、レイリアの拳動は、流石、としか言いようがない。

五尺というとてもなく長い刀身を瞬時に把握して、左手で鞘を掴み取り、納刀したのである。

二年というブランクを、まるで感じさせない、見る者を魅了するほどに完璧な剣技だった。

刀身の全てが鞘に納まると同時に。

神を殺す神剣『神喰』が、その真価を發揮する。

一貫して漆黒だったはずの柄が。

鞘の 本体のそれに合わせるように、白く変色していく。

完全なる白に染まり上がった、かの神剣は。

木でも。

火でも。

土でも。

金でも。

水でも。

ましてや、？虚無？でもなく。

ただ紛うことなき 純然たる？神？という属性だった。

第六部 神喰（後書き）

ながーい！　これでも結構無茶してシーンを区切っています。月織は場面転換の際によく『*』を使うのですが、よくよく見直してみるとここら辺、全く使っていないことに今気がきました。それはそうと、ついに『神喰』の全力、そしてレイリアの復活！あと、あまりにさらっと出てきてしまいました。本来『五行弾』は凄まじい威力を誇っています。一応、序盤の伏線も回収し、いいよクライマックスへ！

第七部 剣聖復活（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第七部 剣聖復活

『神喰は物質を？斬る刀？じゃない、概念を？粉碎する鞘？なのよ』
鞘と化したサヤは、俺の手の中でそう口にする。

『神が持つのは『不死』という概念ただ一つ。神喰は、その概念をこそ破壊する！』
神喰は、その概

来る！

そう直感した瞬間だった。

ニクイ！！

そう、魂の慟哭を上げて飛び掛かってくるソニア。パンドラアーツを掲げて。

俺目掛けて、斬り掛かってくる！

俺はそれを、神喰で受け止める。恐ろしく長いにもかかわらず、凄まじく扱いやすい。まるで十年間使い続けてきた愛剣であるかのように、俺の手に馴染む。

さもありなん。

神喰は、サヤ本人なのだから！

「ふっ！」

俺は膝の屈伸を利用して、ソニアを押し返す。それと同時に跳躍し、距離を縮める！

神喰と 真の力を解き放った神喰と、パンドラアーツが交錯する。神喰がソニアの身体をかすめ、パンドラアーツの鋒が俺の頬を斬り裂く。

迸る鮮血。

それが地に落ちるよりも早く、俺とソニアは二度目の剣戟を交わしていた。

剣と鞘とが、ぶつかり合い。

神と神とが、鎧を削る。

ニクイ！！

ケテ

「つ!？」

今……一瞬、何かが聴こえたような。

『レイリア! 来るわよ!』

サヤの声に現実に戻された時には、ソニアはもう何度目か分からない斬撃を繰り返していた。あらゆる絶望を体現した剣、パンドラーツを振るって。

ニクイ!!

ケテ

純粋な力勝負になりさえすれば、俺が負けることはない。そもそもソニアに剣を振るう才能などないのだし、ましてやキネスシスは剣士ですらない。

(ならば!)

純粋な力勝負になるよう、勝負を《持ち込む》だけのこと!

「ふうっ!」

これだけの長さの剣だ。『どこにどれだけの力をどう籠めれば最も破壊力が出るか』、それを計算して振るわなければならない。

そして、その計算の結果導き出された答え。

「はっ!」

気合一閃。接触が起きたかも定かではないくらいの、一瞬の交錯で。

パンドラーツの刀身に、一筋のひびが入る。

最低の鈍剣を最高の鋭剣に変える。

ならば、最高の鋭剣は、更なる高みへ。

最強の神剣へと昇華する!

神に認められた天賦の才と。

神が手ずから打った剣とが。

五行属性と? 神? 属性とが、この上なく見事に、一つに融合していた。

榮光
gIoryも。

技術
techniqueも。

全て解き放った上で。

自らが振るう剣を選んだ、かつてあらゆる栄冠を欲しいままにした怪物的剣士の、これがまさしく全力全開全身全霊　　！

ニクイ！！

漏れ続ける怨嗟の声。

その中で、俺は確かに聴いた。

タスケテ オニイチャン

そもそもどうして。

さっきサヤに傷を負わせたパンドラーツが。あれほどまでの隙を、攻撃せずに見逃していたというのか。

一つの仮説が浮上する。

封印されていた器の魂は、完全に消滅したわけではなく。

ソニアの魂の残滓が、あの時、必死で食い止めていたとするならば　　。

そして今、パンドラーツの刀身に、一筋の亀裂が入った。

そこから溢れ出るかのように。

束縛されていた封印^{から}の意志が。

器の意志が、外に漏れ始めている。

「ソニア……」

泣いていた。

ソニアの心が。

ソニアの魂が。

なにより、ソニアの、その瞳が。

大粒の、涙をこぼしている。

そうか。お前は、そんな顔をして泣くんだな。

生涯一度たりとも見せなかつた涙を、今。

滂沱と、流していた。

「……安心しろよ」
ちやんと、助けてやるからさ。
俺は構える。

左足を一步前にして身体をほぼ真横に。顔だけを敵に向けて顎を引く。

剣は柄頭が相手の方を向くよう、肩の高さで寝かせるように傾けて。

重心は、真下に向かって左右均一に。軽く膝を曲げて腰を落とす。柄を握るのは、主に右手。左手は、軽く添えるだけ。

およそ普通の剣士としての構えとは程遠い、独特の構え方だった。

「レイリア、この構えは……？」

「俺の、剣士だった頃の俺の構えさ。重力ではなく、剣を振るった際に生じる遠心力を利用して斬撃を繰り出す必殺の構え」

先刻。ソニアがサヤを斬りつける際に使用したのがこれである。

重たての力ではなく、遠心ちよんの力。剣を用いて、斬るのではなく、薙なぐという使い方。

ソニアと二人で編み出したこの構え。剣士はすべからず、縦には強くても、横には弱い。王道ならぬ、破道。これこそが、俺を。

「レイリア・ウィンチェスターだ。推して参る！」

剣士レイリア・ウィンチェスターを、剣聖と言わしめていた所以！

一気に飛び出す。そして繰り出す。心技体、そして速と剣。全てが文句のつけようのない、全身全霊を籠めた一撃を！

斬、という音を。

残、とも立てずに！

横に構えたその姿勢から、横薙ぎに。

一閃する！

涙に濡れたソニアはそれでも、パンドラアーツを構えて、その一撃を防ぐ。

剣と鞘とが、ぶつかり合い。

神と神とが、鎧を削る　　！

ならば勝敗を決するのは。

それを握る剣士としての　　力量！

見る見るうちにひびが広がる、パンドラアーツの刀身。完全に砕け散るのが先か、それとも神喰を弾くのが先か。

ニクイ！！　ニクイ！！　ニクイ！！！！

一際大きな、怨嗟の声。最早物理的な破壊力すら伴って、神喰を弾き返す。横薙ぎに振るわれた俺の一闪を、そのまま真横に。

凄まじい力で　　弾き飛ばす。

『押し負けた　　！？』

「《いや》」

俺は、弾かれた勢いそのままに　　。

《身体を、三百六十度螺旋回転させて》。

「《まだだぜ》」

遠心力を用いるが故に、強い力で弾かれれば弾かれるほど、カウンターとなる次手の威力が増す、この構え。

初手など、言わばフェイク。弾かれることを念頭に置いての一撃目。

これだけの長さの刀なら、回転で生じる遠心力も桁違いのものとなる。

ソニアの死角となる、左サイドから。

心技体速剣。そこに　　。

俺の全てを　　《魔を》、この一斬に注ぎ込んで　　！
「五行斬ごぎょうざん！！！！」

完膚なきまでに。振り抜いた。

まさに、一閃。

一閃が、完全だった。

存在そのものが、残留思念という概念であるパンドラアーツが。砕け散る。

ありとあらゆる絶望を詰め込まれた神剣^{はじ}が。

最後に残っていた、？神？という希望を以て。

『虚無の器』もろとも、天に昇っていく。

ありがとう お兄ちゃん

それから

おめでとう お兄ちゃん

最後に。

レイリア・ウィンチェスターに向けた、ソニア・ウィンチェスターとしての一言を遺して。

キネスシス・ロイヤルアートの魂は、完全に消滅したのだった。

「……莫迦言え」

ありがとう、も。

おめでとう、も。

「どっちも、こっちの台詞だっつーの」

涙の粒が。

ひとしずく。頬を伝った。

第七部 剣聖復活（後書き）

レイリア復活の巻！ てゆうか強すぎのような気がしないでも……。まあ主人公属性持ちはいっただって完璧なのですよ。そんなこんなで、もうすぐ完結です。もう少々お付き合いお願いします。

第八部 約束（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第八部 約束

『……はあ、失敗したなあ……』

俺とサヤは、背中合わせにその場に座っていた。

サヤ、というか、神喰かたななので、人と刀が背中合わせというのも、相当おかしな絵面ではあるが。

本体である鞘に姿を変えても、やはりため息の似合う女だった。

『まさか、初っ端からこんなへマやらかすなんて……とんだ計算違いもあつたもんだわ、本当』

もう、分かっている。

限界なのだ。

あれだけの重傷を負っていたサヤ。そんな状態で、真の力を解き放つておいて、無事で済むわけがないのだ。

サヤは、もうすぐ、消える。

「後悔、してるのか？」

そのことを分かっているながら、俺達はこれまでと変わらない態度で接していた。

俺の口調も。

サヤの口調も。

あくまで、等身大。

何故なら俺達は パートナーなのだから。

今際の際だろうと、その前提を曲げるわけには、いかない。
どんなに心が震えても。

決して声を震わせるわけには、いかない。

『まさか。そんなわけないでしょう。結果として当初の目的であるパンドラアーツの返還には成功したわけだし』

ただ、と。彼女は続ける。

『いきなり全力モードになったのは、やっぱり失敗よね。はあ……、

父親になんて言われることやら……』

そう言って、再びため息を漏らすサヤ。

どんな姿になっても、サヤはサヤ。

絵になるほど、ため息がよく似合う。

「なあ、サヤ」

『うん？』

「俺、銃にふられちまったよ」

『……………』

「妹も今度こそいなくなつて……。また、独りになつちまった」

『……………それで？』

俺の言わんとしていることを。

全て分かつた上で。

意地悪くも、優しく。

サヤは問うのだった。

「剣士としての俺を蘇らせることには成功したけど……お前ほどの剣を一度握っておいて、他の剣を振るうことなんて、できそうにない」

だから。

「お前を待っていて……いいか？」

これはきつと、恋でも愛でもない。

言うなれば、未練。意地汚く生き汚い男の、差し出がましい未練だった。

それでも俺は、この皮肉屋の少女を、忘れられそうもない。

『……………そうね』

サヤは少しだけ逡巡して。

『約束、したしね』

と、言った。

「約束？」

『この仕事が終わっても、あたしのパートナーを続けるつもりはあるか、って訊いたでしょ。……あれ、そういう意味だから』

「……………」
『あたしが戻ってきた時、《他の剣と浮気》なんてしてたら、許さないからね』

やれやれ。

きっと俺は、一生コイツの尻に敷かれるタイプなんだろうな。

その時。

コツン、と。

神喰が動いて。

鞘の先端が、俺のうなじ辺りに当たった。

『……………因みに今の、キスだから』

無機質なはずの鞘かしのから。

温もりが。

優しさが。

伝わってくる。

その感覚が。

消えていく。

温もりが失われ。

優しさが遠ざかり。

音もなく 消えていく。

『神は死なない。だからいつかまた会える』

最後に、そう言い残して。

俺の背中から、彼女の気配が完全に消えた。

しばし、俺はそのままの姿勢で座っていて。

「……………はあ」

彼女を真似て、ため息を吐いた。

でも……………。

(俺がやっても……………似合わないな)

「さて……………」

俺は反動をつけて立ち上がり。

「生きないと、な」

《崩壊を続ける洞窟を》、後にすべく。
「こんなところで、死ぬわけには……いかねえよな」
外の世界に向かって、駆け出した。

神剣『バンドラアーツ安寧禁忌』が封印されていた洞窟。そしてその封印が解かれ、神と神による激闘が繰り広げられた洞窟。

ただで済むはずが、なかったのだ。地鳴りは止むことなく鳴り続き、あちこちで地割れが発生し、天井からいくつもの礫が降ってくる。

完全に瓦解するのは、時間の問題だった。俺の目算だと、もってあと二十分。最奥部から入り口まで、全力疾走してギリギリ間に合うかどうかの瀬戸際だった。

こんなところで生き埋めになるわけにはいかない。

俺は、生きなくてはならないのだから。

ソニアのためにも。

サヤのためにも。

俺自身のためにも　生きなくてはならない。

体力的にも魔力的にも、限界はとうに超えていたが、それでもひたすらに走り続けた。礫が全身に降り注ぐ。大きな石の塊も混ざっていた。頭頂部に直撃して、眩暈を覚えてつんのめったが、それでも意識を失うことはなく。

希望を捨てることなく、走り続けた。

やがて、陽の光が見えた。

間に合った。

そう確信した瞬間だった。

一際大きな地鳴りを立てて、頭上から、耳を聳するような巨大な音と、大量の土砂が降ってきた。

あつという間の出来事。

降ってきた土砂はうずたかく道を完全に塞ぎ、光明は暗黒に遮られた。

……………。

……おい。

ふざけんなよ。

こんな、最悪のタイミングで。

せめてあと、一秒早ければ。

「くそっ！」

土砂をかき分ける。

あと少し。

あと少しなのだ。

出口は、すぐそこにあるのに！

必死で土砂をかき分ける。けれど、押し退けるたびに次から次へと更なる土砂が崩れてくる。硬い石も入っていて、爪が何枚かはがれた。ここは鉱山だ、鉱石は珍しくない。それが、ここにきてマイナスの要因として働いている。素手ではどうあがいたところで無理だ。数分間奮闘した上での、それが結論だった。

銃ではどうか？ ウィンチェスターの残り弾数は四発。実弾銃では、この大きさの土砂は崩せないだろう。五行弾、そして五行斬を合計二回使い切った今、銃は全く役に立たなかった。

なら、他にどこか外に出られそうなところはなかったか？ あるはずがない。一番奥からここまで、道なりに一直線だった。そんな場所があるのなら、とっくに気付いている。

そんな莫迦な。こんな終わり方があってたまるか。考える。何か方法があるはずだ。俺は生きるのだ。こんな、なんの面白味もない土くれのせいで命を落とすわけにはいかない！

(……………《土》?)

はっとした。

外套の懷に手を伸ばす。

確かな手応えがあった。

ああ、すっかり忘れていた。

全く重みを感じさせないから、気が付かなかったぜ。

クライアントに渡しに行く間も惜しくて、そのままここに来たんだっただな。

喜べよ。

最後の最後で、単なる噛ませ犬じゃなくなっただからな。

サヤ、まさか、これを一回にクライアントしたりはしないよな？

俺は、外套から一本の剣を取り出す。

石製の、一尺ばかりの短い剣を。

土精の加護を受けし精剣。

《グランドスラム》！

「道を」

俺はそれを大きく振りかぶって。

行く手を阻む土砂に、突き立てる！

「切り開け」

土の壁が、瞬く間に割れる。中には鉱石 即ち？金？属性の物

質も紛れ込んでいたが、構わず突き立てた。土は金を生む。ならば、

グランドスラムでも貫けるはず ！

強引極まりない、力任せの運任せ。石剣であるグランドスラムは、

耐久力が弱く砕け散ってしまったが、それは確かに、俺に道を作る

役目を立派に果たしてくれた。結果として、成功率百パーセントを

誇る、絶対の『代行篡奪者』レイリア・グローテックの名には、は

じめて 駄洒落のようになってしまっただけだが 土がついて

しまったわけだが、今となっては、取るに足らない些事だった。

何故なら

「俺は レイリア・ウィンチエスターなんだからな」

待ち望んでいた陽の光を、一身に浴びる。

太陽がこんなにも暖かいものだとは、久しく忘れていた感動だっ

た。

それとも。

「サヤ。お前なのかな、この温もりは」

第八部 約束（後書き）

王道的展開と言われてしまえばそれまでですが、ラスボスを倒して、はい終了ー、というのは月織的にノーグッドなわけですよ。あとまあ、ヒロイン消滅ネタもありがちですね。そんなこんなで次章でひとまず完結します。もう少々お楽しみに。

第九部 再会へ（前書き）

以下のルールをご参考に読んで頂ければ幸いです。

- ・ 半角の（ ） で書かれている部分は直前の漢字のルビ
- ・ 全角の（ ） で書かれている部分は主人公の情景補足
- ・ 《 》 で書かれている部分は傍点（強調）

第九部 再会へ

終章

*

携帯電話が、着信を告げる。

かけてきたのは、お抱えのクライアントだった。これまでに少なくとも十本近い賞金剣を集めている蒐集家である。よくもまあ、そこまで振るいもしない剣に執着できるものだ、と半ば呆れるような気持ちで電話に出る。

「はい」

『グローテック。君の腕を見込んで頼みがあるのだが、いいかね？』
「ええ。なんででしょう？」

あの日。パンドラーツを破壊して何が起こって、何が変わったか。

何も起こらなかった。

幸いにも、なのか。

不幸にも、なのか。

それは誰にも分からない。

始まりの刃が消滅してから三年という歳月が過ぎても尚、賞金剣維新は未だ鎮静化する目処も立たず、魔剣も精剣も神剣も、世界中に散らばったままだ。

だが、変わったものは、確かにある。少なくとも、俺にとっては決して少くない変化があった。

剣が振るえるようになった。

けれど、剣を振るうわけにはいかない。

約束があるから。

待っている剣があるから。

待っている人がいるから。

彼女を、いつまでも待っているから。

だから俺は、今日も『代行篡奪者』として仕事を続けている。
グローテックの姓を名乗って。

一度失敗したことで、何人かのクライアントは俺から離れていったが。

異端の銃使いとして、今もこうして生きている。

けれどそれは、決してウィンチエスターという姓を捨てたわけではない。

今なら、胸を張って言える。三年前までは、口が裂けても言えなかったことを。

レイリア・グローテックとレイリア・ウィンチエスターは、同一人物であると。胸を張って。

表向きの事情も、裏向きの事情もなく、ただ、篡奪を代行する仕事を続けている。それがきつと、彼女と再会する最短距離だから。

『頼み、というか、まずは尋ねたいことがあるのだが』

「なんなりと」

クライアントは、仕切り直すようにわざとらしく咳払いをして、切り出した。

それは、予感だった。彼女と再び巡り合う日の。

『神を殺す剣があるという噂を聞いたが、知っているか？』

驚きはなかったと思う。喜びもなかったと思う。

ただ、自然と笑みがこぼれた。

あくまでも不敵で。

どこまでも無敵な。

彼女にそっくりな、その笑みが。

だから俺はこう答える。

「ええ。よく知っていますよ、彼女のこととはね」

『彼女？ 何を言っている？ 私が訊いているのは、神を殺す剣のこと』

ぷつりと。クライアントの言葉を最後まで聴くことなく終話ボタ

ンを押した。

もう、必要ないのだ。

栄光も。

技術も。

信頼も。

必要ない。

ただ、あの日交わした約束だけがあればいい。

「さて」

三年、か。

散々待たせてくれやがって。

会ったらまず、皮肉の一つも言ってみようか。

そんなことを考えつつ。

「小憎らしい彼女に、会いに行くとするか」

この会話を最後に、『代行篡奪者』の名前は、表舞台からも裏舞台からも忽然と消える。

賞金剣維新。

一人の男の悲劇から始まり、一振りの剣から幕を開け、瞬く間に世界全土を風靡した大維新時代。

いつ終わるのかは、誰にも分からない。

いつ終わるのかは分からないが、間違いなく、いつかは終わる。

そして、終わらせるのはきつと、皮肉屋の神と天才的剣士の二人であろうことは、想像に難くない。

賞金剣維新譚

了

第九部 再会へ（後書き）

終・了！ 長かったような短かったような…… まあ私の他の作品に比べたら相当に短いのですが。とりあえずこれで『賞金剣維新譚』の幕を下ろさせて頂きます。もしからしたらいつかまた続編を（勝手に）書くかもしれませんが、その時はお付き合い下さいませ。では、またどこかで。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1712o/>

賞金剣維新譚

2010年10月15日07時10分発行